

目 次

記録写真

巻頭言

教職員の記録文	1
兵庫県南部地震データ	19
地震被害データ	23
新聞・雑誌記事より	25
数学・生徒指導研究より	35
日々の記録	39
生徒への連絡記録	
生徒会だより	
諸記録	
初任者研修レポート	213
支援個人・団体一覧	215
マスコミ一覧	243
沿革史	247
編集後記	250

1」平成6年度職員写真



2」平成6年度 職員組織

		教 科	1 年	教 科	2 年	教 科	3 年
校 長	青山 義昭	英 語	高橋 正明	保 体	市川 伸之	理 科	森脇 毅
教 頭	田中 洋二	理 科	長岡 和雄	国 語	平井 秀幸	社 会	浅野 勇
養 教	吉田 順子	社 会	田中 重明	英 語	三宅 雅子	数 学	松下 竜介
事 務	岡本 真喜子	美 術	田中 伸和	数 学	服巻 博之	保 体	星 輝幸
管理員	片岡 正志	保 体	坂口 和美	技 術	宮原 行雄	音 楽	前田 安正
管理員	矢上 信子	国 語	阿部 薫	国 語	北川 曜子	社 会	加藤 直行
				音 楽	大岡 由佳子	家 庭	田尾 みづほ

3」学級数・生徒数（平成7年1月16日現在）

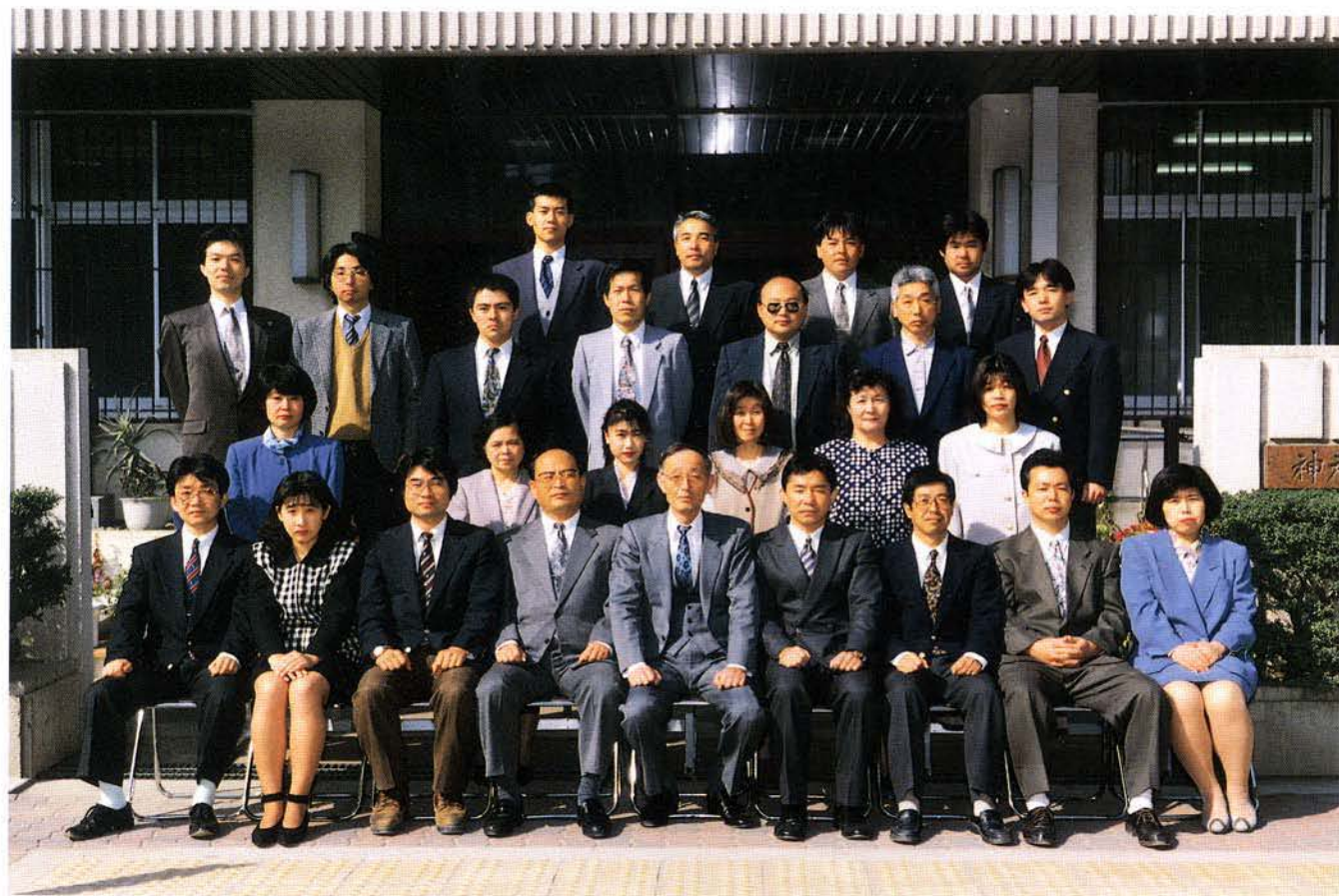
学 年	1年	2年	3年	心障	合 計
学級数	3	3	3	1	10
生徒数	99	94	99	1	293

4」PTA本部役員

会 長	原田 稔	副会長	前田 千代子
副会長	室田千恵子	会 計	小川 富 子
〃	嶋田美恵子	〃	清水 晴 子
		監 査	赤路 信 江
		〃	宮本 貴代美

00095093648

1」平成7年度職員写真



2」平成7年度 職員組織

		教 科	1 年	教 科	2 年	教 科	3 年
校 長	青山 義昭	保 体	坂口 和美	英 語	高橋 正明	保 体	市川 伸之
教 頭	池内 幹夫	社 会	浅野 勇	理 科	長岡 和雄	国 語	平井 秀幸
養 教	吉田 順子	数 学	柏原 伸行	社 会	田中 重明	英 語	三宅 雅子
事 務	岡本 真喜子	保 体	星 輝幸	美 術	田中 伸和	数 学	松下 竜介
管理員	片岡 正志	国 語	富田 敏枝	音 楽	前田 安正	技 術	宮原 行雄
管理員	矢上 信子	理 科	森脇 毅	国 語	田中 幹人	社 会	加藤 直行
		英 語	濱口 由美乃	家 庭	樋口 仁絵	家 庭	田尾 みづほ

3」学級数・生徒数（平成7年4月1日 現在）

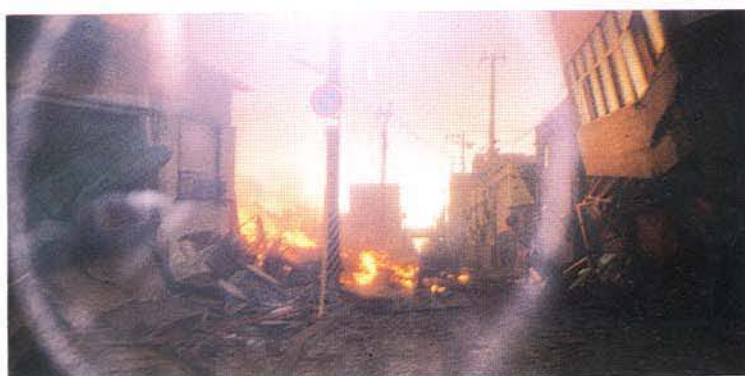
学 年	1 年	2 年	3 年	心障	合 計
学級数	3	3	3	1	10
生徒数	82	86	87	1	256

4」PTA本部役員

会 長	原田 稔	副会長	宮本貴代美
副会長	中西 和美	会 計	橋田 晶子
”	清水 晴子	”	田中香津代
		監 査	中川 律子
		”	村上ひとみ



その日私たちの
街は激変して
しまった。





避難所
共に生き
共に支えあう

伝言板

都市
計画局の
面々

高石ともや氏

舟木一夫氏

神戸市被災者用一時使用住宅 五次
補充予定者の皆様へ

「お願い」
阪神・淡路大震災に避難
されている方以外の洗
濯機の使用はお断
り致します

洗濯機の使用は
朝夕の使用は迷惑に
なりますのでお断り
致します

平素から住居に不自由な方は申請書に記入し、なお、身体が不自由でどうしても暮らせない方
より優先を認めます。(代居人による受付には本市の指定する委託社が必要となります。)
希望地域が申し込み多数のため抽選した方を補充予定者としております。補充予定者の方は、
抽選に当たった方から順に案内させていただきます。



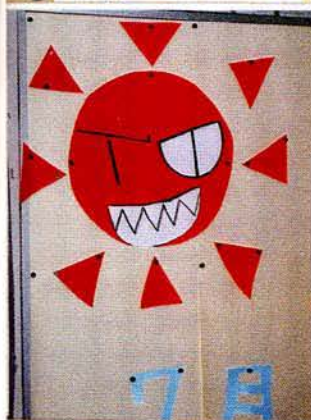
笑顔が一番
本校職員の姿



震災の大混乱の中
を、たくましく生
き、明るく巣立っ
た46回生



震災にもめげず
笑顔の毎日
47回生



私服で実施・修学旅行(九州方面)



みんな助け合って
明るく たくましく 48回生







NEVER GIVE UP 駒中生

平穏な連休明けの未明、専門家の予想をはるかに超えた阪神・淡路大震災は、わたしたちの街、長田を一瞬のうちに破壊してしまいました。胸がはり裂ける思いで一杯です。

一時は1,600名の避難所となった、学校にはマニュアルがない、出口のない負担の重い救援活動に従事せざるを得なかった。

自らも被災し、家族の安否が気になりつつも、交通遮断、火災、道路大渋滞の中、教職員は、歩いて、単車で、自転車で、自動車を途中で乗り捨てて、必死になって出勤してくれた。

「うれしかった」

水がない、電気がない、ガスも、食料も、医薬品も ——

行方不明の家族、知人を求めて押しかける被災者。泣き叫ぶ子供たち。一方では必死の形相で、助けを求める人に素手で救助に向かう人々。

仕事はいくらでもあった。働きながら次の仕事を考え、まさに時間との競争であった。

25名の教職員が、地域の守護神に匹敵する働きをした。でも、寒かった、眠たかった、教室が欲しかった。

叫びたい時もあった。知恵を出そう、じっと我慢だ、冷静に考え行動しよう。

あれから、ようやく避難所が解消になった、今日、生徒たちの明るい元気な声に勇気づけられ、小さな成就感も味わった。

長い間、誰一人として脱落することなく、能力を発揮した優秀な教職員。

彼らには、校長室で頭を下げ見守るほかなかった。

「ありがとう」

じっと耐え我慢した駒中生、それを温かく支え続けたくれたPTAのみなさん、また、神戸市内はもとより、全国各地からの心暖まる物心両面にわたるご支援、激励、献身的なボランティアの方々に、心から感謝申し上げます。

「ありがたかった」

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という諺がある。この大震災も日がたつにつれて、昔語りになっていく傾向がある。この救援活動が教職員にとって未経験で、いかに負担の重いものであったか。これは、その苦しみを風化させないために、何が問い掛けられ、今後どう応えるかの資料として駒ヶ林中学校教職員による記録集である。

平成7年9月10日

神戸市立駒ヶ林中学校
学校長 青山 義昭

多大な支援に心から感謝

教頭 池内 幹夫

平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地震が発生した。神戸市内はマグニチュード7.2の烈震に突然襲われた。この地震による被害は死者5,502人、負傷者33,189人、家屋の倒壊171,481棟である。この地震の発生とともに、電気・ガス・水道・電話などライフラインが寸断され、交通機関は不通になり、都市機能は壊滅状態になった。この日から神戸市民は冬の最中に過酷な生活を強いられることになった。

校舎だけは被害が軽微であった本校はこの日から地震や火災で家屋を失った方々の生活の場になった。予想を越える長期間であった。失ったものの巨大さに圧倒されてしまったが同時に我々は失ったものだけではなかったことにも気がつくことができた。

地震の直後、南の空に何本かの黒い雲が真っ直ぐに立ち昇っているにもかかわらず消防車のサイレンが全く聞こえない、不気味で静かな夜明けであった。柱が傾き、地割れが庭を走り、屋根瓦が全て落ち無残な我が家であった。大きな段差や地割れ、そして標識や照明灯の散乱した道路、前にせりだしたり、傾いたり、ペシャンコになった家屋やビル、なかには火を吹いている家など通勤途上の沿道は凄まじい状況であった。

夕方になっても、朝に倍する黒煙を上げて神戸の街が燃えていた。その夜から家族を高校へ避難させた。夜になると南の空が真っ赤に染められ、それは、まるで生き物のように見えた。2日目の朝になってもまだ火勢は衰えていなかった。

朝早く、山あいからサイレンの音を消して、市内に入ってくる十台をこえる広島ナンバーの消防車とすれちがった。思わず、窓を開け、一台一台に大声で「ありがとう」と声をかけた。「早く、頼むぞ」と念じて。涙が出てしかたがなかった。ただ頭を下げ、手を振って感謝を伝えるのみであった。あれほどうれしく、心強く思ったことはなかった。

以後、毎日どれだけ多数の他府県ナンバーの車に行き合うようになったらうか。涙がこぼれるような全国から支援・救援の手であった。また、「遺体搬送中」と掲げたワゴン車に行き合う時は、火葬場も間に合わないのかと思うと申し訳ない気持ちで手を合わせたものであった。

4月1日に震災の最も激しかった地域の本校へ転任した。私が目にしたのは避難者数550名、ダンボールで仕切られた廊下、車でいっぱいグラウンド、仮設トイレの列、いたるところ落ちていたゴミと煙草の吸殻、ガムテープで張られた掲示物の数々、外観はまさに混乱の極みとしかいいようのない状況であった。とても学校の雰囲気ではなかった。

しかし、避難所内部の運営は外観とは違い安定した状況で推移していた。夕方7時を過ぎると550名もの人がいるとは思えないほどの静かさであった。これも、校長をはじめとする教職員の献身的な活動の賜物であった。卓越した洞察力で教職員が徹底してかわる時期、自治体職員に全面的に委ねる時期、避難者の自治組織を育て、主体的に活動していただく時期を的確に見分け、それぞれの時期に応じた対応を指示するリーダーシップの重要さを、また、それに基づく初期対応の重要さを知ることができた。

こうした中で、自治会（本校の場合は婦人会）組織が中心とはいえ、避難所運営は多くの人的支援活動が必要不可欠である。24時間対応する対策本部要員（神戸市各局、兵教組、他府県自治体、市内各中学校等からの派遣者及び本校職員）の大変さは言及するまでもないが、今回、特筆すべきは数多くの若いボランティアの温かい支援活動であった。

全国の企業、自治体、学校、個人などあらゆるところから寄せられたさまざまな救援物資、そして大渋滞の中を救援物資を運び込んでくれた人々、物資の仕分け、配付をしてくれた人、被災者に温かい料理をと炊き出しに来てくれた人々、肩たたきやオカリナの演奏に来てくれた人、病気や怪我の治療に貢献してくれた医療関係者の皆様たち、中にはグラウンドの吸殻を拾ってくれた中学生等、数多くのボランティアのすがすがしい活動は若者たちへの認識を新たにすると同時に人の心の温かさを実感できる日々であった。そして、顔が見える援助がいかに大切であるかを再認識したものであった。

生徒たちへのアンケートのなかに今回の震災を体験して最も感動したことはどのような事であったかを問う質問があった。群を抜いて多かった答えは、地域の人々の温かさ、多くの地域の人々からの支援、そしてボランティアの活動の3つであった。また、最も強く感じたことは何かとの質問には地震の怖さ、恐ろしさよりも人々が助け合い支え合うことの大切さの方を上げるものが圧倒的に多かった。これは、生徒たちが今回の救援活動に対して強い感謝の気持ちを持っていること、そして、励まし合い、助け合うことの大切さを身に沁みて実感したことによるものであった。今回の震災で余りにも多くのものを失った我々大人にとって、今もっとも勇気を与えてくれることのひとつであった。

大震災 その目私は

前駒ヶ林中教頭・現桃山台中教頭 田 中 洋 二

1月17日、早朝5時46分にわずか20秒間の大地震が発生、これでもかこれでもかと、たたきめされるような大揺れが小康状態になり、まず家族の安全を確認した。そして校長はじめ教職員に電話連絡をしようとしたが、すでに不通だった。まもなく停電が復旧し、テレビの映像で神戸のあちこちの惨状が映し出される中、「学校が燃えている」ように見え、急いで学校へ向かった。途中、火災や倒壊した家屋のため通行がままならず、大きく道を迂回し、いらいらしながら学校へと急いだ。まるで真っ黒な雷雲と真っ赤な夕焼けが同時に空をおおっているかのようであった。

11時30分頃、ようやく学校へ到着し、啞然とした。いつもと様子がまるで違っている。塀が倒れ、グラウンド、校舎が広々とあけっぴろげに眺められた。校内には校長はじめ数名の教員がすでに到着し、避難された方々の調整、避難所本部の設営や内外の対応に大忙しの状態であった。机、戸棚が散乱し、校長室の1トンもある大金庫が一つは倒れ、もう一つは1m以上も移動するなど、足の踏み場もなく、とても手のつけられるような状態ではなかった。さらに、続々と増え続ける避難者の方々の誘導や問い合わせ、マスコミへの対応などに追われ続けた。

食料がない、毛布がない、水をくれ・・・といったさまざまな要望を受け、区役所の職員と相談し、その対策に追われ手配もしたが、一向に物資が到着する気配もない。避難者からの次々の催促にも、時折あびる怒声にも対応しきれず、じっと待つしかなかった。実は、仮にすぐに到着したとしても、避難者の人数など、その実態を殆どつかんていない状態で配分方法など難問は山ほど待っていた。夜になって、バナナ80本入りの箱が21箱到着。職員で手分けして一人一本ずつを手渡して配って歩き、全部配り終えたときに、バナナの残り本数から初めて避難されている方々が、約1500名であるという実情をつかむことができた。同時に、責任の重大さを思い知らされた一時でもあった。

深夜になっても、次々と訪れる被災者や、避難者への問い合わせ、さらに校舎北側の道路1本へだてて燃え盛る火災現場の監視などで職員の疲労もピークに達し、気力だけでもっている感じてあった。なおも続く余震と、燃え盛る火災に怯えながら、一夜が開けた。今だに生徒の安否、所在のつかめない職員の安否が、まだ殆ど把握できていないことが気になって仕方がなかった。数少ない職員で、2日目には避難者が1600名に増えた避難所としての対応に追われたこと、また校区外に学校が存在する特有の事情があることなどから、情報の収集がままならず、本来第一にすべきであった、生徒の確認が丸一日たっても殆どできていない状態であった。再度、数少ない職員を係分担し、黒板に名表を張り、「見た、会った、聞いた・・・」といった聞き取り調査を続行した。「293人全員が無事らしい」と確認できたのは震災から6日目の23日(月)の午後であった。また25名の職員全員の無事が確認できたのは、21日(土)のことであった。

施設の被害調査と安全確認など、早急にやらなければいけないことを、後に廻さざるをえなかったが、生徒、職員に一人の死者もなく、また施設に大きな被害もなかったことが、多くの悲しみのなか、なによりも大きな喜びであった。

18日(水)になって避難されている方々の実態と、施設の使用状況がようやくつかめてきた中で各部屋ごとの代表者を設定し、そして代表者を中心とした組織的な動きが少しずつできはじめた。

行政による避難所としての本部もようやく軌道にのり、学校が本来やらなければいけない動きがとれたのは、1週間後の24日(火)からであった。他の中学校からの教師の応援を得て、使用できる教室の整理に取り組み、特別教室などようやく6教室を確保した。その間、本校教師は、被災した校区へでかけ地域の実情把握と生徒の安否を、本人又は家族から直接確認する作業に取りかかった。「よかった、生きていた！」—長楽公園で集合した際に、生徒同士、生徒と教師の間にかわされた再会のこの言葉の中に人間としての本当の喜びが感じとれた。

学校再開、授業再開へ向けての取り組みがいろいろ考えられたが、不十分な施設、足りない教材、そして何よりも避難したまま遠くに住んでいる生徒のことを考えると、とても早期の授業再開は望めなかった。とりあえず、2月1日(水)から補充教室を開き、毎日の出席者数を克明に記録した。その数が日一日と増えるにしたがって学校再開へ向けての力強い励みとなった。

今、振り返ってみると、当初はやむを得ないとしても、避難所としての対応に追われ、本来学校でなすべきことが全くできなかったことが悔まれる。また、職員の頑張り、情熱でもってなんとかしのいできたが、その疲労や、家族の犠牲には計りしれないものがあったと思われる。誰も予期せぬ出来事であったが、このような異常事態に直面したときに管理職として先ず何をなすべきかを前もって十分研究しておくべきであった。目先のことだけにとらわれず先を見通し、熟慮し、決断しそして実行されていた校長の姿に、管理職としての厳しさを学び、さらに職員を気遣う思いやりの心のなかに度量の大きさと人間としての温かさを感じさせられた。

大震災を通じて、やりとげたこと、できなかったこと、やらなければいけなかったこと、やろうと心がけたこと、それぞれたくさんあるが、やはり一番最初の混乱期に対応が後手後手になったことが悔やまれる。二度と起こってはほしくないが、貴重な体験として、心に刻むべきものが多い。

突き上げるような縦揺れに続き、思いきりゆさぶられた横揺れに一家で布団をかぶり、恐ろしく長い時間に思えた。揺れ戻しのあと路上の車に避難。近所の方の「ガス栓を止めよ」の声に手分けをして走る。家に戻り垂水区と北区の実家に連絡を取り、全員無事と家屋などの無事を確認。同じ北区の教頭宅へ連絡、情報交換をするが被害が甚大のようであり、代わりに同じ北区の校長宅に連絡を入れる。校長宅も被害が大きく、「家族と家庭のことを済ませてから出勤せよ」を全職員に連絡網を廻せとの指示を受ける。が、西区の星先生以外電話は不通。携帯テレビの映像にて市内の状況を知り、再度校長宅に連絡を入れ情報を伝達し、7時30分に車で迎えに行くことにする。妻と子供を実家に送り「いつ帰ってこれるかわからない、子供と両親を頼む」と言い残し校長宅へ向かう。屋根瓦が落ち、ドアも開かない。校長がドアに体当たりをして出てくる。校長宅出発8時。

道路既に渋滞。鶴台あたりまで火災の煤が落下。鹿松町より長田区の全貌を見る。幾つもの火柱と煙。地獄を見る思いがする。カーラジオは情報を伝えるが、車は進まず、あせりは募る。さらに道路は隆起、陥没、段差と行方を阻む。五位ノ池から板宿へ。家屋の倒壊が始まる。家の1階がない。西代から新長田へ。火災現場に突入。校長「止めとけ」「いや、つっきます」と強行突破。しかし、学校周辺道路は家屋の倒壊、火災、電線切断等で進入不可。車を乗り捨て学校到着。すでに11時。いつもの9倍の時間を要した。

グラウンド南塀倒壊。電柱大きく傾く。グラウンド避難者多数、亀裂3本。廊下にも避難者多数。保健室怪我人多数で混乱状態。職員室施錠されたまま。本校職員と出会う。「校長が来るまで締めておきました」と報告を受ける。校長「職員室を開けて本部をつくらう」で鍵を開ける。ロッカー類が転倒し、書籍、紙類、コンピューターが散乱。これらを土足で乗り越え校長室へ。重量1tの金庫が転倒。もうひとつも約1mほど移動。事務室、転倒物でドア開かず。力づくで開けるが使用不可の状況。教頭も到着。本校職員が三々五々集合。これまでの経過、校舎の状況、避難者の状況等の報告がなされる。校長を中心に打ち合わせを行う。その間にも、避難者からの問い合わせ、行方不明者の問い合わせ、救助の依頼。誰もが目前に突きつけられた問題に対応せざるを得ない状況に追い込まれる。いったい何人の方が避難されているのか、これさえわからない。他校からバイクで駆けつけてくれた先生が、救急用品の調達、区役所への救援要請等に活躍。うれしかった。丸山中の先生が仲間の安否確認に来校。本校では仲間の安否どころか、生徒の安否確認にも手が付けられていない。午後区職員の支援到着。本校職員2名を校区内へ生徒名表を持って送りこむ。これがやっとであった。しかし、人手不足と、混乱状況はさらに悪化してくる。「お前はここですべての記録をしる」との校長の指示で、転倒した金庫を机がわりにノートを用意する。さらにホワイトボードを2枚用意し、職員への連絡用と共通ルールの記入を始める。都市計画局からの支援到着、区職員と交代。今後の避難所運営について話し合う。支援物資が何も届かない。情報が入ってこない。また情報を伝えたくても、その手段がない。食料が欲しい。学校のすぐ北側の火災が心配だ。けが人を搬送したい。区役所に走っても、そこも混乱している。けが人は、避難者の自動車やパトカーを捕まえてこなければ搬送出来ない。火災も岡山の消防車にたのんでつれてくるが「プールを開けて」「いやプールないんです」「えっ」。夕方遅くバナナのダンボール到着。さて、「どうして配るか」。結局職員が各部屋に行き、一人一人に手渡ししながら配布することにする。薄暗い中、声もなくのびてくる手に厳しさを感じる。大きな混乱もなく終了。残りから避難者数が約1,500名と推定された。既に夕闇のなかだった。ラジオからは安否情報が刻々とながされる。しかし、本校生の安否確認はほとんどできていない。仲間の安否も不明のままである。技術の先生が「3年生の作品マルチライトを配ろう」と提案。さっそく配布する。暗闇に明かり。何かホッとした一瞬であった。その明かりをもとに避難者名表作りをする。白紙に鉛筆の手書きである。黙々とした作業となる。しかし、一方では「大阪から自転車でも身内を捜しに来ました」「朝、広島を出て、やっと到着しました」と安否確認も続いていた。名表に住所名前を記入していただき各部屋入り口に掲示をする。この作業は深夜に至る。

深夜、校長室のパイプ椅子で休もうとしたが、休めるものでなかった。交代で格技室北側の火災の様子を見に行く。頭を抱えたただ見つめる住民。グラウンドの真ん中で余震を感じる。でも校内は静かである。学校周辺は消防や警察、救急車のサイレンですごいのに校内は静かである。約1,500名の人々が自然の驚異に恐れおののき、身をよせ合い、息をこらしているかのようであった。まるで獅子に追いつめられた獲物の心境か。「教頭先生静かですね」「うん、夜が明けたらどうなるかな」

最後に、今後どのようにしたらいいのか不安だった我々に、18日校長より一つの指示がでた。第1クールとして1週間は、教職員が窓口になり初期対応をし、トラブルをさけること。なお、その間に市対策本部職員と共同でことにあたり、1週間後の第2クールには、避難所運営は市対策本部職員にまかせ、教職員が学校再開にむけて専念できるようにすること。そして、最終的には第3クールとして、避難所内の自治組織による自主運営をめざす。また、避難所運営は9月当初までと予想して、「安全」と「信頼」を合い言葉に「共存」を考えていくこと。以上の指示であった。なんとなく腹が決まった気分となり、やれることからやっいていこう、じっくりとやればいいのだと落ち着くことができたのだ。

1. たくましい小さな生命

大激震の日から停電のため電動シャッターにさえぎられていた理科室は1月21日まで誰も立ち入ることは出来ませんでした。初めて理科室の戸を開けたときのあの臭いと光景は口では言い表せないほどひどいものでした。特に自然環境の乏しい駒ヶ林中学校に少しでも潤いをと苦勞して揃えた8台の水槽には、金魚・鯉・カメ・カエル・熱帯魚・カブト虫・ブラックバス・腐葉土を入れていたのですが、無残にもそのほとんどは棚から落ち、床の上でカラカラにひからびていたのです。このような状況の中で思わぬ朗報もありました。壊れた水槽の下引き出しを開けたときのことです。わずかに数ミリの水がたまって、いる中に数匹の金魚が体の片面だけを水に濡らしながら生きていたのです。震災以来涙もろくなっていたせいもあって、思わず涙がでてきました。また、カメは壊れた水槽から這い出して理科室中を這い回ったのでしょうか1匹はカラカラに乾いて教室の隅にうずくまり、もう1匹は、後日床に落ちた腐葉土の中にもぐり込んでいたところを支援できていた桜ヶ丘中の先生によって発見してもらいました。亀は万年生きるといいますが、あの寒さと乾燥しきった教室の中でじっと耐え生き延びていたなどカメに強い生命力を感じました。

2. 薬品管理

最も気になっていたのは、薬品庫からの出火でした。1月21日の夜準備室に懐中電灯一つで入って行きました。薬品庫の2つは棚から転倒して逆さまになり床に穴を開けて落ちていました。観音開きの薬品庫からは何本かの薬品瓶が飛び出し、押しつぶされ、床一面が真っ白になっていました。棚から落ちてきたホルマリンづけの標本が割れ中身が散乱しており、その臭いが部屋中に充満して鼻を突いてきます。2台の薬品庫の扉は変形して開かないためバールでこじ開けました。中で化学反応を起こし発火するかも知れないからです。常設のコンクリート製薬品庫の中には硫酸・塩酸・硝酸などの劇薬を保管していましたが、砂皿を下に敷いているためまったく割れておらず、改めて薬品管理の大切さを思い知らされました。

3. 備品、棚、ロッカー類

第一理科室のスチールロッカーはすべて倒れ、生徒の実験台に倒れかかっています。もし、授業中にあの地震が起きていたら、ガス・薬品・ガラス器具・ロッカー類から身を守らなければならない、想像しただけでゾッとしてしまいます。準備室の書類棚も上部が倒れ、下部がそのうえに倒れかかっていました。第2理科室の顕微鏡はロッカーごと下に落ち中から数台の顕微鏡が押しつぶされて部品が散乱していました。準備室に入ると、長さ4メートル高さ90センチメートルの木製の棚がドーンと落ちています。幸い第2理科室には危険な薬品類は保管していなかったもので大事には至りませんが、まさかあんなに大きな棚まで落下してくるとは驚くばかりです。また、教師用の大きな実験台が15cmずれ水道パイプが割れているのに、生徒用の実験台はずれていないのです。これは、よく見ると生徒用の実験台だけ足に金具がとりつけてあるためだとわかりました。実験中にあの地震が起きていて、実験台が動き出したらどうなるのでしょうか。ちょっとした手だが大震災の際に大きな役目を果たすこともわかりました。

4. 理科室安全対策10ヶ条

- (1) 劇薬品類は砂箱の砂にうめ、完全に隔離せよ！
- (2) 薬品はしきりのある保管庫におさめよ！
- (3) 試薬類はケースに入れて保管せよ！
- (4) 薬品庫は金具で壁に固定せよ！
- (5) 棚の上に重い物をおかない！
- (6) 倒れやすいロッカーなどを生徒実験室に置くな！
- (7) 実験台は金具で床に固定せよ！
- (8) 消化器はできるだけたくさん常備しておく！
- (9) 停電時、電動シャッターの開け方を研修しておく！
- (10) 日頃から、整理整頓に努めよ！

さあ、そろそろ起きようと思った朝5時46分頃、ゴゴゴゴと地鳴り、ミシミシとゆれ出す。

「地震だ。大きい。」いつもより、長い縦ゆれが始まりタンスが倒れてくる。まだゆれている。

やっとおさまり、タンスをずらしてふとんから出る。懐中電灯が置いてある部屋は、グチャグチャで本棚が倒れ、ガラスが散乱し何がどこにあるのかわからない状態となっていた。暗い中、下に降りるとガラスがやはり散乱していたのでスリッパをはき、台所の母親の所へ行く。台所はこれまたガラスだらけの上、棚が全部倒れて食器も散乱していて歩けない状態であった。母親はその奥から出てきた。と、玄関付近で「だいじょうぶですかあ。」と近所の方の声がした「はい、大丈夫です。」と答えるが聞こえないようなので、ドアを開けて出ようとするが開かない。鍵がかかっているのかと、まわしてみるがどうやら開いていたようで逆に鍵はかかってしまう。もう一度まわしてドンと力いっぱい押すとガチャとやっと開いた。

前の家の人が下敷になっているというので、家のことは母親に任せて助けに行く。おばあさんを30分後に何とか出せたが、おじいさんは頭部を柱にはさまれ、すでに亡くなっていた。その裏の家も1人が下敷となっており、助けにみんなで走った。声をかけてみるがもう返事もない状態であった。角のアパートでは子どもが3人も亡くなっていた。

そうこうしているうちに県道をはさんで北側の阪神石屋川駅付近に火の手があがっていた。サイレンの音、しかし車の音はしない。妙な静けさが漂っていた。よく見てみると自宅が傾いている。塀は全部倒れているし、ガレージのシャッターは中の車が前に出ようとして膨らんでいる。周辺はガス臭い。町内の人々が小学校へと避難しはじめた。しかしすぐに、小学校付近は火の手があがっているのも中学校か高校に行くようにと連絡がはいる。電話をかけようとするが、通じない。駒ヶ林中はどうなっているのかと心配していた。ラジオが無かったのでガレージのシャッターをこじ開け、車を出しラジオをつけた。大きな地震があったことのみが告げられていた。詳しくはわからない。父親は会社が近いので自転車で出勤するという。

私も駒中へ行こうと車を出す。棚がくずれたためトランク部がつぶれていたが、充分走る。しかしガソリンがあまりない。とりあえず走り出した。道が波うっている。いたるところが割れている。43号線へと出ると大渋滞となっていた。阪神高速が落ちそうになっている。大石川へやっとたどり着く。見ると六甲道から大石付近へと火の手が見えた。その周辺のビルもくずれている。大石川の橋が30cm以上もせりあがり車の通行ができない状態となっている。トラックはそこを何とか乗り越えて行くが乗用車は通れない。何とか横道に逃げ、2号線へ出ようとするがいたるところで家が崩れて通り抜けできない。ガソリンも少なくなってきたので引き返すことに決めた。それから家に着くのに1時間近くもかかってしまった。そして近所の方々と小学校へと向かう。もう、グラウンドには車があふれていた。近くには火の手があがっているのに消防車は来ない。みんなでバケツリレーをする。水が出ないので小学校のプールの水を使うが、すぐにカラっぽになり、ただ火を見つめるだけであった。同僚のM氏宅が小学校の近くなのを思い出し、見に行った。全壊となっている彼の家には人がなかった。その近くに実家があるのでそちらにいてみるとほどなく、奥様に会うことができ無事なことを知った。本人とも会え、とりあえずの打ち合せをする。

実際に駒ヶ林中学校に連絡がついたのは3日後であった。本山に住んでいた同僚と連絡がついたのは更にその2日後であった。

その時はそう思って疑いもしなかった。あの朝、奴が来る少し前に何故かしら目覚めていたのは、連休最終日の為に早く夢路へついたからで、でも本当はそれらの全てが夢の中だった様な気がして……。

「布団をかぶれ!」、奴が来た時に一番に私の口から出たことばがこれで、長く……か、短く……か、とにかくわけのわからない時が過ぎ、暗闇の中でマッチと蠟燭を取り出す。揺れ戻しが心配で、すぐにキャンプ用のランタンで明りを採る。世間は静まり返り、いますぐにでも闇の中へ沈んでしまいそうな時が流れる。周りには知りたい情報などまったくなく、とにかく明るくなるのをラジオと家族で待った。「親は?」少し落ち着いてふと頭によぎった。私の両親は確か明石の伯母の家のはず、鉄筋の公営住宅だからまず大丈夫であろうと希望半分で納得する。実は家に居たら大惨事になっていたかも、という状況であった。妻の両親は?。大橋5丁目で食堂を営む、義父・義母そして義伯母。夜明けと共に余裕もでき「今ごろは割れた食器を片づけながらきっとぶつぶつ文句を言っているにちがいない。」と二人で話したが、悲しい知らせを聞くことなどもちろん知るよしもなかった。

次に頭に浮かんだのは混乱する生徒達の姿だった。登校して右往左往しているのではないかと思い出した途端、腹がへって来た。幸いガスが無事だったおかげで昨日のみそ汁の熱いやつで腹を満たすことができた。ゆっくりと身支度をしながら「車」「バイク」の選択をし「バイク」で出陣する。

相変わらず街は静かだったが、すぐ後に奴が残した大変な足跡に遭遇することになった。いつもの路が崖崩れで不通、妙法寺より東へう回、長田区北部に入り南部へと向う、宮川町から宮丘町へ、道路は隆起、陥没。壁が、ガードレールがねじまがり、板宿に着いた時には地獄の入り口が待っていた。「学校は?両親は?」すでに時間の観念はとんでいた。「壁がない」と思った瞬間、我に帰った。すでにグラウンドには数人が集まっていた。目の前にある一つの現実の為、残された思いは後回しになってしまったことを後悔している。

「鍵がない」の思いと平行にすでにガラスを割る決意をする。その決断をベストだと思った。情報が欲しかった。次の仕事の段取りをこの混乱の中でベストに近い判断をするためのものがとにかく欲しかった。その為にも少しでも動きを止めてみることにした。次に頭に浮かんだのは「店」近くに居ながらたどり着いたのは9:00を過ぎていた。二階建ての店は一階になり傾き、その前に義父・義母の無事な姿があり一安心。義兄夫婦もかけつけていたが、そこには義伯母の姿はなかった。聞けば行方不明との事。その後、義兄は兵庫区やあちこち心当たりを、私も駅や付近を捜すも発見できず。この時すでに二階の家具の下で永い眠りについていただけだが、誰も信じられずにひたすら捜した。

すぐに職場に戻った私は、すでに他の全てを忘れ、目前対応へと力を注いだ。

家族の事を思い出したのはすでに日も西に傾きかけた頃、大変な状況で今日は帰れなく店も大変なことで妻も動揺していたが、今は動かないように指示だけをした。

時の流れが止まってしまったかと思う程の長い夜が3~4日続いた。一生忘れられない様々な「思い」を体験できた事は、幸か不幸か、とにかく何らかの答えは出るだろうし、出すのは自分自身であるのはまちがいない。

19年間の教師生活の中で、今まで自分が信じてやって来たことや言って来たことの全てをもう一度見直さなければという思いがし、これから先、そんな中で、本当にやらなければ、言わなければいけないことを、きっと見つけ出さなければ、このまま「奴」に負けては終わりとくない。本当の自分を捜さなければ。

夜明け方、ゴォーという音が聞こえたと同時にドン。ガタガタと横揺れが続く中、寝ている子供の上にタンスが倒れないように手足でひたすら押さええていた。「長いな」と感じた。電気がつかない。真っ暗闇の中であった。近所の人たちはカーラジオから情報を得ようとしていた。エンジンの音がやまない。私は情報を把握しようという意志は少なかった。手探りで懐中電灯を取り出した。妻と子供に渡し、水槽からこぼれた水を拭いた。さらに木棚に木を戻した。余震が続いた。次第に夜が明けた。しかし深い曇り空の朝だった。

出勤の時刻が近づいてくる。電気・水道は役に立たないままであるが子供に用意をさせた。その日は「進路検討会」の日であり、会議の後の予定もありスーツで出かけた。今振り返れば軽率な判断であったがそのときは「その程度」の地震と思っていた。午前中は「家庭訪問」、午後から「会議」であった。玄関を出たところでお向かいのご主人が「地下鉄が止まっている」と知らせてくれた。「歩いていこう」と私はそのとき決めていた。小学生の子供は友達と登校するつもりであったが、車に乗せ小学校に向かい職員室を訪ねた。すでに教頭先生と管理員さんは出勤しておられ、子供を祖父の家に連れて行くので登校する場合は祖父の家に連絡していただくよう依頼して、保育園に向かった。保育園では、園長・副園長の両氏は壊れたガラスの片づけをしておられ休園とのことであり、子供を祖父に預けた。

妙法寺駅まで車で行き、歩き始めた。8時40分頃であったと思う。停滞状態であり、車が数珠繋ぎであった。その中に同僚がいた。声をかけてもらったが歩く方が速い気がして遠慮した。妙法寺周辺では塀際の積み石が落ちていたり屋根瓦の土が落ちていたりのが所々で見られた。南の空は暗く赤く煙っていた。板宿方面から歩いてきたと思われる青年二人がすれ違いざまに「下は地獄やな」と言って過ぎた。何なのかと思った。5分ほど行くとアパートが燃えていた。ここから様子は一変した。各家々の壁は落ち崩れ、柱は曲がり、瓦は地面に打ちつけられていた。板宿の北側の地面は褶曲し、滝川高校の南側の塀は崩れてしまっていた。山陽電鉄板宿駅はプラットホームが崩れ架線が垂れ下がっていた。さらに下ると地面はめくれあがり、板宿駅南東は一面が大火災状態であった。学校へと急いだ。火災によりなかなか真っ直ぐには進めずやっとの思いで学校へたどり着いた。南門へまわる。塀が・・・崩れていた。校庭には多くの人。格技室は開いており、いっぱいの人避難していた。少しすると同僚に出会う。私より早く出勤していたが数人避難されている人々のお世話に当たっていた。北校舎の鍵を壊し人々は教室に入っていく。鍵のかかっている教室は自ら鍵を壊した。このとき「学校が私たちのものではないと杭で突き刺された」思いがした。「学校は地域の人々のものなんだ」と思い知らされた。これは今でも鮮明に記憶として残っている。

次が学校の鍵であった。出勤途中預かっていた金物屋さんのをのぞいたが鍵は見当たらなかったため、再度探しに行き、同僚が見つけた。出勤しているもので校舎の開放を進めた。1階、2階、3階、体育館と普通教室の開放を進めた。格技室の北側の民家が延焼し始めており格技室は危険になったためでもあった。老人や病人は畳などを使い一緒に運んだ。ただ管理棟と特別教室については学校の保安・安全管理上シャッターは開けないこととした。

全く情報のない状況であり、放送室を開けた。設備はことごとく倒れており電源もはいらない状態であったが、何とか復旧させた。全館にラジオを流した。

この情報提供には判断を要したが、「現実の情報提供」が人々の冷静な行動をよぶと思った。そして次に「よびだし」が始まった。フルに校内放送が役立った。そうしていると、学校長・教頭が出勤し管理棟のシャッターが開いた。

そして昼過ぎ、電気が消えた。それからの活動はすべて「足」を使うこととなった。呼び出しは、メガホンを持ってすべての部屋をまわることとなった。トイレは水が出ないためすぐに使用不可となり、トイレに関しては仮設トイレが来るまではグラウンドに穴を掘ることにした。

その中であって緊急の食料品として届いたバナナはその時間的な速さと量の点で感心させられた2000本近くの量で一人一本は確保できた。そして一人一本ずつ手渡していった。この方法は部屋代表制が確立するまでの間の大切なハウツウとなった。緊急時ほど「平等・均等」を心がけることとなった。

午後は学校周辺の家屋に閉じこめられた人の救出が主な仕事であった。しかし、私は自分の無力さを痛感して引き上げるだけであった。

余震はつづき、初めての夜を迎えた。

校区内の家庭訪問に出る。意外と電気は消えていない。大正筋は燃え尽きていた。残る煙と臭いが目と鼻を突いた。崩れた家も多く生徒の安否が気にかかった。訪れた家では無事な様子が伺えた。周辺の火災・緊急車の鳴り続くサイレン・ヘリコプターの騒音の中で迎える夜であった。しかし、校舎内は物音の聞こえない世界であった。ひっそりと夜が過ぎていった。各部屋には生徒が技術の授業で作ったライトがあるのみであった。校長室で私たちは朝が来るのを待つ。机の上ではラジオが震災の様子をとぎれることなく流し続けていた。そして余震が幾度となく私たちの目を覚まさせた。

生徒の安否、同僚の安否、家族の様子そして一人のまみにしている母のことが気にかかりながらの夜であった。

1. 17の記憶

田中 重明

1月17日朝、あの地震から1時間半余りが経った。妻が、家の片付けのために仕事を休むというので、出勤することにした。その考えが大いなる間違いであると後悔するのに、多くの時間は要しなかった。着替えてバイクに乗り、まず実家へ向かって両親の無事を確認してから駅へ向かった。電車は止まっていた。このとき家に引き返すこともできたが、あのひっくり返った部屋の片付けより戦場を選んだ。

そのままバイクで国道2号線へ出て、東へ進路をとった。塩屋辺り、古い家が倒壊している。異常にガス臭い。路面が隆起したり陥没したりしている。バイクが路面の影響をもろに受け、飛び跳ねる。想像以上に様子がおかしい。これはただ事ではないぞ。須磨、鷹取、東へ進むほど酷い。学校の近くまでやってきた。思わず我が目を疑うような光景が目の前に広がっていた。南門の前に立った、どこかちがう。塀がすべて倒れていた。門があることが、何かしら虚しく感じられた。

グラウンドで長岡先生と市川先生に出会った。戦場の同僚に会えたことが、やけにうれしかった。田中ノ先生もいた。でも、その3人だけだった。3人ぼっちの学校に、見知らぬ人々がどんどんやって来た。というより、彼らの方が先客であった。そして、人の波はとぎれることなく学校へ押し寄せてきた。なぜかわからないが格技室の扉が開いていて、避難者がすでに中へ流れ込んでいた。とりあえず格技室にどんどん入ってもらおうということになった。浅野先生が、コートを着てやって来た。名谷から歩いてきたという、恐れ入った。4人になって一層心丈夫になった。

あっという間に格技室は人で埋まった。何とか校舎を開けるために、マスターキーがほしい。キーを預けている安随商店に行ったが、無駄足だった。店が傾き、開きっぱなしの勝手口から覗くと店の中は減茶苦茶だった。呼んでも返事がない。無断で入り込んでキーを捜したが、見つからなかった。避難者は増えるばかり。扉のガラスを割り、鍵を開けて北校舎に入ってもらった。1階廊下もすぐに人で満杯になった。今度は1階の教室のガラスを割って教室を開け、避難者に開放した。まだ続々と避難者がやってきている。そこそこで火の手が上がっている。学校のすぐそばも燃えている。黒煙が空を覆い、昼間なのにまるで夕方ようだった。避難している人々は、寒さに震えながら何かしら虚ろだ。戦時中の防空壕に避難している人というのは、きっとこんな感じではないかしらと思った。時間の経過に伴って職員の数も増えた。それからいろいろなことがあった。どんな順番で何をしたか、断片的な記憶が脳の中でプレスされていて、それを1枚1枚はがそうと思ってもはがせない。そんな感じで、細かなことは思い出せないでいる。思い出したくないのかもしれない。夕方になり、少し落ちついた。今夜は学校に泊まらなければならない。自宅のことが気になるので、一度家に戻って再び出勤することにした。

家はすっかり片づいていた、妻に嫌みを言われたが、それも致し方ない、感謝。学校の状況を話して、缶ジュースを何本か買い込んで自動車で学校へ向かった。これが大失敗だったのだが、そのときは真っ暗で信号もつかない凸凹の道路を、とてもバイクで走る気にはなれなかった。大渋滞、東へ進めば進むほど車の数が増えていく。ほとんどが避難の車であろう。何とか若宮辺りまで来たが、国道2号線はそれ以上東進できなかった。迂回すると、また渋滞に吞み込まれた。それを繰り返して、気が付けば鷹取駅南東部の大火災地帯へ迷い込んでいた。消防士に叱責されながら両側が真っ赤に燃える道路を突っ切った。まるでカースタントでもしているようだった。結局、学校まではたどり着けず、大橋9丁目の交差点の近くに車を置いて歩いて学校に向かった。到着時刻は、およそ午後9時頃、家を出てから3時間あまりかかった。すいていれば20分くらいの道のりだ。

この日から毎日毎日、36年間の人生で体験したことのないことが起こっていく、たった数カ月で36年分以上の経験をしたと言え過ぎかもしれないけれど…。書けば、話せば、きりがない。聞いてほしいことは山ほどある。しかし、こうやって書けるということは、命があったということで、それは何物にも代え難い幸福である。亡くなった5000名以上の人々の冥福をただただ祈るのみである。

『震災を通して得たもの』

松下竜介

グラグラ・・・地震だ！とっさに右手は、枕の後ろにあるタンスを支えると同時に左手は、息子（雄太：1歳2ヶ月）をわしづかみし、脇にはさんだ。タンタン・・・と突き上げてくる強烈な震動に耐え切れず左手の息子は、いつの間に私の右側に放り出されていた。

平成7年1月17日 午前5時47分。私は、思いつき叫び声を上げながらも、無意識に行動していた。不思議であった。揺れがおさまり、妻（慶子）が言った。「ふとん かぶっていたほうが いいかな」ともその言葉が新鮮で『生きていることを実感』した。

タンスは倒れなかった。（もちろん私が支えたわけではない） 息子の無事も確認した。（小さな、きょとんとした目で私を見ていた）しかし、ガスと土壁の臭いで息がしにくかった。木造二階建て築30年の貸家の二階は北に傾き、いち早く屋外に出ることしか頭になかった。一番近い窓を開けた。一階から老夫婦の声が聞こえた。（数時間後無事救出） しかし、折れ曲がった材木があちこちに散乱し、暗い中状況が分からなかった。生き地獄だった。

5時50分にセットしていた目覚まし時計が何事でもなかったようになりだし、パニックの限界であった。地響きが聞こえた。二階が一階になっていることに気づき、台所を横切り下駄箱でふさがった玄関には目もくれず西の部屋の窓から息子を抱きかかえ家族三人で裸足で脱出した。外は、「なぜ、私の家だけが」と思わんばかりの静けさだった。みんなどうしたんだ。何をしているんだ。できるだけ安全な所へ行きたかった。

「すぐ後で来るから」 一階の老夫婦のいると思われる方向に、私は妻と声をかけ合った。土壁のほこりが街灯に浮かびあがり、その臭いが町中をおおっていた。近所にある私の実家に無意識に足が向いた。実家へ行く途中の街灯の下で、妻と息子と三人掛け布団にくるまりながら『夢』ではないことを確認しあった。

西の方角（石屋川）で火の手が上がっていた。避難場所となる小学校（御影）の鍵を実家が管理しているので鍵を借りてすぐ開けようと思った。町中が静かだったのもつかの間、いたる所で叫び声が聞こえてきた。ようやく、人の気配がし、祖父母、両親の無事も確認できた。妻と息子を道に止めてあった車の中に避難させた。近所の人に靴を借り、父親に一階の老夫婦の話をし、小学校の東門を開けに行った。グラウンドなら安全であることを避難してきた住人に呼びかけた。

妻と息子に声をかけようと車に戻る途中、近所の中年の女性に呼び止められ救助を求められた。私は、家を飛び出したままの半袖の姿で『だれか手を貸して』と大きな声で叫ぶと、四名の男性が集まってきてくれた。よいいける。男五人集まれば・・・。甘かった。現場に行くなり救助する道具も何も持ち合わせていない私たちは呆然とした。余震がなおも続く。救助するための道具をと思い実家に戻るが突然腰痛と震えにおそわれた。地震直後の衝撃と緊張か、足腰に激痛が走り、力が入らない。立っているのが精一杯であった。祖父の杖を借り、自分のできることをしなければと気持ちだけが先行した。何もできなかった。「どうして、どうなっているんだ」と叫びたかった。

明るくなるにつれて、町並みの悲惨な状況が目に見え込んできた。一階の老夫婦は無事助け出され、笑顔で対面できた。何もできなくてごめんなさい。

小学校のグラウンドには、車や徒歩で避難してきた住民がいた。小さな子供もたくさんいた。グラウンドの片隅で息子がグラウンドの土で砂遊びを楽しそうにしていた。助かってよかったと実感した。

ゼロからスタートした方が楽だと自分で錯覚し、復興なんて頭になかった。だから、開き直り何でもできると錯覚していた。現状から目をそむけるといっても卑怯な方法をとっていた。そうでも考えないと、やりきれなかった。

震災4日後に駒ヶ林中学校に行き目が覚めた。自分の役割を果たさなければと思った。現状をしっかりと見つめ、把握し直さなければならぬと自覚した。また、青山校長先生の「長期戦」の言葉で学校は『教育活動の場』であることを再認識した。

この震災で、『私が得たもの』はとても大きかった。

その日の朝、いつもより30分早く目が覚めた。
テレビをみながらタバコを1本吸い終わる。頭の中はまだ起きていない。
コーヒーを飲もうと立ち上がった時、地震がおこる。
ふとんに潜り、数分待つ。揺れはいっこうにおさまらない。「なにすんねん」という気持ち。
水の漏れる音と外からの話し声が聞こえる。あれこれ考えたが体が動かない。
何度か大きな揺れを感じた後、少し落ち着く。部屋の中はグチャグチャだったが、幸い建物自体にはたいした被害がなかった。
…この時は「これから」の事を何も考えていなかったし、考える気持ちすらなかった。…

6時45分を過ぎ、とりあえず学校に行こうと思い、垂水駅に向かう。
空に月が見えた。東がやけに赤かった。いやな感じがした。
途中、屋根の崩れた家や亀裂の入った道路を見かける。ローソンに行列ができていた。
駅に着いたが、予想通り電車は動いていない。そのまま学校へ向かうことにする。
ラジオから流れる声で、はじめて「大変なことになっている」事を認識する。
塩屋の抜け道を通り、国道に出る。車は一台も走っていない。全壊の家を何件か見た。
須磨を過ぎる。悲惨な状況が次々目に飛び込んでくる。
ここまで来ても、赤い空の原因がわからない。鷹取駅が見えた時それがわかった。
…とんでもない。引き返そう… 一瞬そう思った。

途中で車を降り、急いで学校へ向かう。ありえない町並みを抜けて学校にたどり着く。
南壁がなかった。グラウンドにはすでに数十人が集まっていた。…格技室が開けられていた。
が、誰も入っていない。何人かに声をかける。「大丈夫です。」「学校の中は安全なんか?」
「あんた、先生か、はよ開けたってくれ。」「なんなんこれ! どないなんのん。」
いろんな返事があったが、誰もが憔悴しきっていた。
地震の揺れで一箇所トビラが開いていた。そこから入ってみたがシャッターで進めない。
もう一度何人かに声をかけ、いったん学校から離れ、国道を渡る。

二葉公園でNに会う。「大丈夫か?」「うん、でも家かたむいてもた。」笑いながらそう言う。
行く道々で数人生徒を見かける。片付けを手伝う者、親と店を見に行く者、
そんな中で毛布にくるまったKとTに会う。Kが言う。「先生、どうやって来たん? 学校は?」
「それどころちゃうやろ、家は大丈夫なんか?」「うん、大丈夫みたい。おかあちゃんが、
危ないから外出とき、ゆうて、なー」Tがうなずく。
「先生、これから大変やなー」Kが別れぎわに言った何気ない一言だったが妙に心に残った。
チャリンコ2人乗りのIとNとすれ違う。「あっ、先生」「なにしとんねん」「ちょっと
まわり見てこい言われてん。」「家大変やろ?」「うん、でもおってもする事ないし…」
「そんな事ないわ、助けたってよ」「うん…」
ひとしきり歩いた後、学校に戻った。

朝礼台の前にI先生とS先生が見えた。少し安心した。が、鍵がない…
グラウンドの人数はどんどん増えていく。
どうしようもないのでガラスを割って中に入った。
体育館を開けた。普通教室も開けた。…できる事をするしかなかった。…
そうするうちにA先生、H先生、N先生が到着する。どの顔も緊張していた。
今でもよくわからないが、その時はなぜか電気が生きていた。放送室を開けラジオを流す。
…不思議と気持ちが落ち着いた。…

この後も混乱が続き、夜を迎える。空は赤いまま…
この時、何もせずに家を出た事を後悔した。
…異様な空のすきまに月が見えた。…

あの1月17日午前5時46分ドーンという音とともに、隣文化住宅からの悲鳴が目がさめ、その後の横ゆれで事の大きさを感じました。ガラスの割れる音とともに書棚や食器棚が倒れ寝室以外は足の踏み場もない状態でした。地震直後、九州の姉から安否を問う電話がかかり家族の無事のみ伝えることができました。一瞬にして暗黒の世界となりました。その日の内に兵庫勤労市民センターへ祖父母家族と一緒に53日間の避難生活が始まりました。

1月20日に出動し保健室へ入ると布団収納庫のロッカーは倒れ、2台あったベッドは1つになり診察台も消えていました。私が出動するまでに、いろいろな方により室内は救護室として片付けられていました。本校では幸いなことに近くの協同病院の看護婦さん等がボランティアで数日泊まっていたり学校すぐそばの前校医のN先生が巡回してくださいました。その後は横浜医療団・赤十字社の巡回、協同病院の応援にお世話になりました。周辺には救急病院の協同病院や高橋病院も地震直後から開業しており最重症の方はすでに病院で手当てをうけ本校にはほとんどいませんでした。しかし、お年寄りも多くまた、持病をもたれた方もあり何回となく救急車要請はありました。

1月26日から熊本県医療団チーム（医師・看護婦・保健婦・薬剤師・運転手など7～10名）が常駐して、4月9日まで、本当に安心した避難所の診療室としての医療活動に携わっていただきました。その間、保健所の医療団や精神相談・歯科医師団の巡回も数回行われました。医療以外にも環境衛生のためのトイレ消毒など他府県の保健所の方々にお世話になりました。

保健室の復活

1月31日から生徒が学校へ変則ながら登校し授業も少しずつ増えてきました。2月半ばを過ぎると仮転出した生徒も少しずつもどってきました。熊本医療団もその頃には日勤(9:00~18:00)となり明石で宿泊していました。その頃から仮保健室を美術準備室におき対応しました。結局3月31日まで保健室は救護室のまま、学年末を迎えました。

新しい年度に入っても、医療団の診療と巡回のためしばらくは保健室としての機能は果たせませんでした。

心のケア

被災後の心のケアについて一月過ぎたあたりから大きく取り上げられ始めました。精神科の巡回相談も計画され数回にわたり専門のカウンセラーの方が来られました。

日に日に復興は目覚ましく、生活も軌道に乗り始めたかにみえますが、子供たちを含めた被災者の心の問題は、今から大きくとりあげられるのではないのでしょうか。

<震災から得たこと学んだこと>

—家族や人と人とのふれ合いの大切さ—

吉田 順子

1月17日午前5時46分「ドーン」という大きな地響きと共に体が横に投げ出されました。まさか、の阪神・淡路大震災でした。食器棚や書棚が倒れ、部屋の中はガラスや食器の破片が散乱し、言葉では表現出来ない惨状となりました。外では、救急車や消防車・パトカーのサイレン、自衛隊や取材のヘリコプターの音が絶えることなく数週間わたって鳴り響き、水道・電気・ガス等のライフラインははずたはずたに寸断され、近代都市神戸は一瞬にして崩壊してしまいました。

1月24日には、死者は5,000人を越えたと報じられました。神戸市内の学校関係においても、園児5名、小学生107名、中学生47名、高校生17名、養護学校生2名、教職員11名の尊い命が奪われました。ご冥福を心からお祈りいたします。

大震災から4ヶ月が過ぎましたが、私達は（大震災から）多くのことを学びました。水道・電気・ガス等の大切さは言うまでもありませんが、「家族や人と人とのふれ合い」が一番大切ということでした。子ども達は、焼けたり、壊れたりした家をボー然と眺めていた両親や大人達を初めて目にしました。その後、力を合わせて復興へと少しずつ立ち上がっていく様子を、力強さや感動を覚えたことと思います。避難所で自主的に、ボランティア活動に参加した子ども達も沢山いました。

6月現在、本校では240名の避難の方々と一緒に学校生活を送っています。お互い支え合いながら、子ども達は毎日元気です。

地震を体験して

神戸市立駒ヶ林中学校英語講師 Michael Anderson.

Before coming to Japan in July of 1994, I had never experienced an earthquake of any kind, small or otherwise, because they never occur in the United Kingdom. Although we had learned, when school students, that earthquakes often occurred in Japan, I am sure that the group of foreign teachers which arrived in Kobe that summer never imagined that within six months they would experience something of that nature. Along with those other teachers, I learned many things about daily life in Japan and in Japanese schools, but we received only a little information about natural disasters and how to react when one occurred. Of course, one always hopes that such information will never actually be needed.

In January of this year I was living, as now, in Okubo (Akashi), and on the morning of the seventeenth I was preparing for school at 5:46 am. Although I understood immediately that an earthquake had begun, it seemed that I was hesitating as to what to do next. At that time I was very fortunate in that, although the apartment building shook very violently, it received no serious damage. Already on that first morning I was able to contact friends in Kobe by telephone, and it was even possible to call my family in the United Kingdom. Not having seen any TV news programmes it was difficult for my friends and I in Okubo to appreciate what exactly had happened, since the Akashi area was not affected in the same way. The situation in Okubo and other parts of Kobe, such as Nagata-ku for example, could hardly be compared. When the first news pictures appeared we were shocked at the things that we saw. Family and friends in England, however, could see only selected NHK pictures and thus imagined that the whole of Kobe had been affected in the same way, Akashi included.

At the time I was working as a teacher at Otsukadai Junior High School, and was able to go there on January 18th. Until I went there I had no idea about what kind of situation I would find. Of course my images of those first few days are still very strong today, and I shall never forget the kindness shown to me by many people at that time- fellow teachers, friends and complete strangers. Obviously most people had themselves never experienced anything of this kind but I was struck by the way in which their efforts were concentrated on providing the basic necessities of food and shelter, not only for themselves but for everyone. I think that at that time my friends and I learned many new things about Japan that we had not recognised before. Since things in Okubo seemed to become almost "normal" again quite soon, my friends and I wished to be able to do some activities as volunteers, but this was difficult because we were poor speakers of Japanese and also because those around us wished to see us

happy and comfortable rather than working as volunteers. They were surprised that we wanted to do this work ! With other teachers I was able to do some volunteer work. Although those things seemed rather simple and minor, we wanted to do even the smallest thing so as to give back a little of the great help that we had received.

In May, whilst I was working at Kande Junior High School, I came with other teachers as a volunteer to Komagabayashi. This was already four months after the earthquake and since Kande is a school in the countryside, I was very surprised when I came here because the situation was so different to the one which I could see at Kande. It was not that those people living in other parts of Kobe which were not so badly affected had forgotten about the earthquake, but their focus had changed a little. In Nagata-ku, of course, people were, and are, still living with many problems after that day in January.

By coincidence, from September I began working as a teacher at Komagabayashi. I am enjoying my life at this school very much and I have received a very warm welcome from everybody. Ten months have passed now since the day of the earthquake. In a few months time I shall return to England with many memories of Japan. Although the Great Hanshin Earthquake is not in itself a "happy" memory, of course, it is impossible to forget. I will always remember the efforts of all the people that I have met and whose help I have received- teachers, students and volunteers from all over Japan. To everybody I wish all happiness and success.
Thank You and Good Luck always.

—そのとき私は—

『当日の朝』

柏原 伸行

とにかく何が起こったのかわからない。停電のため情報が全く入らない。近所で「震度6」という声が聞こえる。あわてて懐中電灯を捜す。ガラスの破片で足を切る。(その時には気づかなかったが) 近所で様々な声がする。表へ出てみると雪がちらついていて。家がどのような状態かわからない。やたら外がガス臭い。家族は無事だが赤ん坊の為の水分がない。水漏れの音が気になる。電話は全く通じない親子3人布団にくるまって明るくなるまで待つ。このように何から何までどうしてよいのか分からないままその日1日中片付けだけで終わってしまった。次の日、水の確保のため加古川市の兄宅へ早朝走り帰ると夕方近くになっていた。その後西宮へ水を届けにバイクで行く。地獄のような風景を目にした。このように数日間大変だったが、現在生かされている事に感謝して、今までより一層努力精進していきたい。

『無事でよかったですね』

平井 秀幸

未明の大地震より続く余震の中を家族のことも気になりながら、早朝の7時に家を出て学校に着いたのが昼前であった。高取山より見える白煙を目のあたりにし事の重大さが認識される。しだいに南下していくにつれ白煙が黒鉛になり始め、長田区内に入った頃よりオレンジ色の黒煙の中を突き進む。あまりの惨状に目頭が熱くなる。

中学校のグラウンドには、毛布にくるまった人々が互いに肩を抱き身を寄せあっていた。その中には自分の学校の親子の姿もあった。「無事でよかったですね」と発した言葉は後に適切な言葉であったか自問する日々が来る。その親子の住居は見るとも無惨に押しつぶされて全てを失っていたのだ。学校は避難所として機能を始め、同僚たちは忙しげに働いていた。申し訳ない気持ちを持ちつつ校区に出かけていった。当日は2千人近くの被災者の方々の世話を数人の職員で当たっていたことを思うと自分のとった行動は適切でなかった事は責められても仕方がない。

家々は押しつぶされ、火の手は回り始めていた。戦争体験のない自分に空襲を思い起こさせた。耳に入ってくる情報は悲しいものが沢山あった。火の勢いは脱兎のごとく、まわりの家々を飲み込んでいく地域の人々と生徒と一緒に破裂した水道管より水をくみ消火活動にあたる。火の粉の舞い散るなかを生命の危険も省みず活動されている人々に後ろ髪を引かれながらも、その場を後にし生徒の家々をまわり始める。まさに火が迫りつつある生徒の自宅を発見し、「中学校です。手伝います。」と言い二階より荷物を運び出す。

その日より学校に泊まっての勤務が始まった。食料もなく毛布もなく暖をとるために、式典用の白布にくるまり大きな白地蔵と化した職員が椅子に座ったまま夜を明かした。明日のこと、これからのことは誰にも分からなかった。朝が来た。校区内に出かけると、「先生、生理がきた。生理用品とショーツなんとかして」と恥ずかし気に申し出る生徒に、少女としての悲痛な叫びを感じとった。

『地震を体験して』

前田 安正

5時46分、一瞬のうちに起こった地震が、街をつぶし火の海と化した。まだその光景が頭の中から焼き付いて離れないでいます。地震のすごさが物語っているように思い驚きでいっぱいでした。テレビで映される神戸市内の状況は、悲惨なものでした。私の実家は灘区にありますが、回りの家、ビルなどが傾き倒壊しているのがほとんどでした。幸い一命はとりとめました。が家の中は物が飛び散りタンスは倒れてめちゃくちゃな状態でした。また、ライフライン、交通網のストップなどで人とのふれあい、ありがたみ、ものの大切さなどを思い知らされたような気がしました。普段何げないことでもいざとなるといろいろな事が必要にんなってくると感じました。そのためにも一日一日を大切にしていきたいものです。

『3日目の朝』

長岡 和雄

3日目の朝、校長室の倒れた金庫の横で目がさめる。誰かが「区役所には食料があるらしいぞ」と言っている。真夜中でも10分おきに人を捜しに来る。そのためほとんど寝ていないので起きるのが辛い。ともかく区役所へ車に向かう。区役所の前にパンが山のように積まれている。駒中に持っていくからという、聞いていないので渡せないと言われる。こんな時でもたらい回しかと思いつつ対策本部に向かう。驚いたことに、区役所に避難している人は弁当を食べているのだ。駒中是一日ひとりバナナ1本パン1個ぐらいだったのに。対策本部でもたらい回しは続く。ぐずぐずしているとパンはなくなってしまう。「ええかげんにしてくれ、パニック起きても知らんぞ」と怒鳴ると、手のひらを返したように親切になる。自分も混乱の中で冷静さを欠いていた。

車にバンケースを運んでいると、「兄ちゃんそのバンドこ持っていくねん」と厳しい声と視線。「駒中に持っていくねん2千人待ってるから」と言うと、とたんに穏やかに「兄ちゃん頑張りや」と声がかかる。みんな必死である。車にバンケースごと積むがとうい2千人分入りそうにない。ケースを出してバンだけほうり込む。最後にはドアを閉めて窓を3分の1開けて、そこからさらにほうり込む。助手席も同様である。そのとき新聞社のカメラマンが写真を取りにきた。「避難所に持っていくんやで、略奪しとんちゃうでええように撮ってよ」というと、カメラアングルの注文をつけてくるので憤慨した。「そんなんやったら手伝って」と怒鳴ってしまう。わかってはいても、報道する暇があったら手伝って欲しいと考えていたのは私ひとりではないだろう。

ともかくバンに埋もれて駒中にもどる。バンを降ろすのは任せて、別の車で再び区役所へ。今度は前田先生と一緒に心強い。2回目は「避難所に持っていくから通して」とこちらから声を掛けながら通るとあちらこちらから「頑張れよ」と声が掛かる。3往復目は校長先生と一緒に。バンはなくなりお茶を積み込む。いっばいに積み込んだので窮屈そうに校長先生は助手席に座っている。やけに足が長かったのが印象に残る。これだけやっても一人当たりバン2個分しかなかった。目がさめてからわずか2時間の事であった。今思い返すと、最初の3日間いろいろあったと思う。市川先生の教え子で看護婦の管田さんが不眠不休で働いてくれていたのも3日間だけだったなんて、信じられない。その他にもいろいろあったけど、本当に長い3日間だった。

『障害児学級の担任として』

富田 敏枝

私はこの震災で、障害児学級の生徒を通して、多くの事を学び知りました。自閉傾向の情緒障害の生徒がひとりいましたが、家は全壊で壁は落ち、階段はぬけた状態でした。地震が起こった日、すぐに生徒と会いましたが、恐怖のあまり自分の殻に閉じこもったきり一言も話そうとしませんでした。パニックは起こさなかったようですが「いつパニックが起こるかどうかわからない状態でとても避難所に入れませんでした。」とお母さんは言われました。水、食料も近くの公園までとりに行っていました。何度かパンと牛乳などを差し入れしていくうちに、心がほぐれ一週間後ぐらいにようやく話ができるようになりました。そのうち家を取り壊すということで引越を余儀なくされました。「仮設住宅を申し込めば」と私も進めたのですが、障害児をかかえてとても仮設住宅には住めない」ということで結局お母さんの友人を頼って熊本に引っ越してしまいました。この震災でもお母さんは常に「迷惑がかかるから・・・」ということをやっと言われました。今回ほどこの言葉が重くのしかかったことはありませんでした。障害児をかかえている上に、身動きがとれない親をみて、担任としてなにも出来なかったことが悔しかったです。

『無我夢中の6か月』

田中 幹人

1月17日、地震発生時に学生だった私は、下宿先の徳島県にいました。徳島でもかなりの揺れだったので、ただごとではないと思いすぐにテレビをつけて情報を確認しました。時間が経ち被害の状況が明らかになるにつれて、しだいに怖くなってきました。私の生れた神戸が見るも無惨な姿に変わり、死者が日に日に増え続けていました。様々な救援活動について報道されるたびに、何もすることが出来ない私は、ただ、「頑張って」と祈るしかありませんでした。3月末大学を卒業して、駒ヶ林中学校を初めて訪れた途中、いまだに倒れかけのままの建物や焼失した家の跡の更地に菊の花が供えられているのを目の当たりにして、思わずためいきをつくと同時に痛ましく悲しい気持ちになっていました。4月に着任してからは、とにかく、何らかの形で復興のお手伝いが出来ればと思い、右も左も分からない状態でしたが、他の先生方にご指導をいただきながら、無我夢中で取り組んできました。そして、9月に学校は避難所としての業務を終えました。しかし、本当の復興はこれからです。震災直後の大混乱の時期に神戸におらず、何もできず本当に申し訳なく思っていますが、今後の神戸の復興に向けて教員として生徒たちと共に日々前進していきたいと思っています。

『呼出し』

森脇 毅

「日吉町3丁目の〇〇さん、若松町9丁目の××さん・・・」半分つぶれかけのハンドマイクを持って格技室から北館の1階、2階、3階へ、そして体育館へまわり本館の2階1階をまわる。廊下も視聴覚室も職員ロッカー室も、なかよし教室も避難してきた人でいっぱいになっている。外へ出て自在庵にも声をかけて職員室に戻ると、次の呼出しを待っている人が並んでいる。ノートにメモを取りもう一度同じルートを声を掛けながら歩いていく。夜になっても延々と深夜まで、安否確認の人が尋ねてくる

「避難者名簿はないんか！」と声を荒げる人もいる。「そんな余裕はありませんよ」とわかっていただく。どのへやにいても不気味なくらい静かだった。呼出しの声だけが静寂を破る。「朝から何にも食べてないんや、何にもないんか、えーっ？どーなっとんや」と鬼のような顔をして怒鳴られた。「私も何にも食べていません」「この学校の職員です。私は。」と言い返すと「そうか、すまん、でもな本当に何も食べてないんや・・・」同じようなやり取りが何度かあった。

呼出しをしてもほとんど「はい」という返事はなかった。何度か「はい、私です」と返事が返ってきて、その人を誘導して尋ね人に会わせ、抱き合って無事を確かめあっておられる姿を見た。自分の事のようにうれしかった。何度も呼出しを続けるうちに、何としても避難者名簿が必要だと思い始めた。これではどうにもならない。後から後から尋ねて来る人が増えるだけだ。「この紙に名前と住所を書いて下さい」、薄暗い教室の中を紙と鉛筆が回されて行く。ほとんどの人が無言のまま書いていった。停電が続いていたのでコピーもなにも出来ず、避難者名簿を教室や廊下の壁に貼ってまわるのがやっとだった。昼間でも外は煙で薄暗く、ましてや夜が来ると学校中が真っ暗になる。その中に2千人近い人がじっと息をひそめ、寒さと不安と時々襲って来る余震にじっと耐えていた。3日目、私は初めて靴下を脱いだ。足の爪が内出血して真っ黒になっていた。

『震災後の新採教員』

濱口 由美乃

この4月から、バタバタしどおしだったように思う。入学式前日まで新入生の人数が定まらない。入学式にジャージで臨む新1年生たち。1年生のホームルーム教室は家庭科室や美術室を使用するなどスタートの時点から、何もかも平常時とは異なる環境で生徒たちも落ち着かず、右も左も分からないまま私は、戸惑いの日々であったように思う。

それと同時に、危険と隣り合わせの時期でもあった。ヘルメットをつけての2号線での登校指導。崩れかけたビルの隣の仮設教室での授業など、私達教員も、生徒たちも、いつ、どんな事故が起きるか分からないといった状態であった。今、思い返してみると、平常に戻った現状が夢のような気がする。

『震災事務室』

岡本 真喜子

「あ！」、地震後初めて足を踏み入れてみた事務室にびっくり、書棚が倒れ 引き出しから飛び出した書類が見事に散乱していました。机も壊れていました。地震直後は冷蔵庫、食器棚も倒れ、レンジも落ち、足の踏み場もなかったとのこと、割れた多くの食器類は片付けていただいていたのですがそれでも事務室の中はまだまだめっちゃくちゃでした。「どうしよう、どこから手を付ければ・・・」と一瞬 戸惑ったのを覚えています。手伝ってもらいながら一応仕事が出来ようになったのは1週間か10日位たってからでしょうか。なかなか落ち着いて仕事が出来た状態にならなかったにもかかわらず、宿日直事務、特殊業務事務、ほか震災関係の書類が次から次へと送られてきました。通常の仕事に加え、近づく年度末事務処理をしながら、期限に遅れないように書類を作成することだけで精一杯で、書類を見直す余裕もなく提出して来ました。大事な書類が行方不明になり再発行してもらったこともありましたが。宿直したことでかえって仕事はかどったこともありましたが・・・。あれから10ヶ月 新しい備品が次々と入り、見た目は元に戻ったようですが、今もずっと続いている震災関係の事務処理がいつも頭のどこかに引っ掛かり、早くすっきりしたいと思っている今日このごろです。

『あの一日』

樋口 仁絵

地震のあった朝、居間に家族が集合し何本かのろうそくに火をつけた。薄明かりの中で、「板宿に電話しようか。」と母が言い、かけてみたがずっと話し中であった。「学校に行く前に寄るわ」と早めに私は出かけた。南に向かうにつれて、風景が殺気だって行くように思われた。山電の踏み切りを越えた頃には、目を疑った。いつも通る道が倒壊したビルや家により、曲がり角すら分からなくなっていたガレキの上をバイクを押し祖母宅近くまで行った。道路にはみ出すように倒れた家がそれと気付くのに時間がかかった。近所の人「さっきまで中の方で声がしていたんだけど。」と呟いた。家へと急いで帰って「祖母が、」といいかけて涙が出た。弟が家を飛び出しバイクで走り出した。家族で駆けつけ近所の人と2階の床をはがし、足をはさんでいた家具を壊し祖母を出した。途中で燃えているアスファルトに驚きながら鉄板の上を歩き、学校に行ったらたくさんの人が運動場にいた。でも私が地震の影響力を知ったのはその夜のニュースによってであった。

『かけがえのない財産』

坂口 和美

震災後一週間ふりになんとか交通機関を乗りついて学校に向かった。その光景はテレビで放映されていた時よりも想像を絶するもので、あまりの街の変わりように涙があふれてきた。私自身、家の方は被害も最小限ですんだのだが、……。一步足を学校に踏み入れたとき「みな無事だったあ？」と私。

「お母さん生きとったんか」と先生方の言葉。体育館、格技室、教室、廊下と被災された方々が肩をよせあっておられた。先生方も疲れがピークに達していたが、生徒たちがひとりまたひとりと元気な姿を見せてくれたのが、何よりも心の支えになったと思う。「形ある財産はなくしたけれど、心にかかけがえのない財産を築いてほしい」と思う。心の暖かさ、思いやりにつつまれた人間関係も多く生まれたことと思うし、この経験を通してまた一つ成長したことでしょう。支援してくださった方々に心よりお礼を申し上げます。

『地鎮祭の跡』

宮原 行雄

瓦礫がとり除かれ、きれいに整地された空き地。赤茶けた土の色が、火災による高熱にさいなまれた傷跡を残している。地鎮祭をした跡らしく、木の板と白いお払い紙が風に揺れている。大地の神の怒りを鎮めるためのこの儀式が行なわれるようになった時代の気持ちが体で実感できる。われわれがいかに平和ボケしていたことか。国内外の各地で起きている多くの災害が、連日のように報道されていても、そこから学ぶことが何と少なかったことか。本校のまわりでは、あの日乗り越えてケミカルシューズの会社の7割が操業を開始した。街角には、ありあわせの木片でつくった屋台の店で、元気な声を張り上げるご夫婦の姿がある。かれらに勇気と力を分けてもらい、この未曾有の体験から学んだことが、ひとつひとつしっかりと生かされるよう努力をしたいと思う。

『あの日の記憶』

三宅 雅子

1月17日。あの日から数日は、様々な感覚が止まってしまっていたような気がします。身内の者が生き埋めになっているという知らせを受け、混乱の中を9時間かけ芦屋までかけつけた途中で見た光景食べ物や水を得るために5時間共に並んだ人とかわした会話。1コマ1コマの映像や音は残ってはいても、時間の流れや寒さは、全くといっていいほど感じませんでした。ただ映像で見た長田の炎が頭の中を真っ白にしてしまったあの日の夜の事は、昨日のことに思えます。そして数日後、自分の目で見た長田の光景は、あの日他人の家で見せてもらったテレビが写したすものより、ずっとすさまじく悲しいものでした。燃え尽きた空き地に供えられた花。崩れ落ちた家を見つめ岬然と立ちすくむ大人。その傍でまだ現実がよく分からず遊ぶ幼い子ども。そんな光景の中から立ちあがり、長楽公園に集合した駒中生の笑顔は、きっと一生忘れません。重すぎる現実をしっかりと受止めながら「先生の家大丈夫やったん?。」と聞いてくる心のあたたかさ。あの時言えなかった「ありがとう。」をみんなに送りたい。深夜に安否を気づかい公衆電話に並んだ友達。先生方。そして誰より、何より、生きる有難さと暖かさを教えてくれた駒中生のみなさまへ、〃ありがとう、〃

『阪神大震災』

星 輝 幸

あの朝「ドン」という音で目が覚めた。すぐに、あっ地震だと思ったが何もできなかった。頭の横に電灯が降ってきた。「ガシャガシャガシャ〜ン」と家の中の物がつぶれる音が凄じかった。フラフラしながら懐中電灯を探しに隣りの部屋に行った。すぐ見つかったが、電池が切れていた。もう一つは、かすかに明りがつく程度だった。家の中を見渡すとぐちゃぐちゃで目が点になった。余震がおさまりかけたので、ガス栓を閉め、すぐに子供に服を着せて外に出ようと思ったが、玄関が下駄箱で開かない状態だった。何とか下駄箱を動かし子供を抱えて外に出た。そして、車まで移動し避難した。さいわい、車にテレビを付けていたので、ニュースで淡路島が震源地である事が分かった。この時は、まさかこんなに地震の被害がひどいとは思わなかった。時間がとても長く感じた。ようやく明るくなってきたので、家に戻ると家の中は無惨な状態だった。電話は使えないだろうと思っていたら、実家から電話があったみんな無事だということで安心した。安心したら、学校の事が気になった。いろいろな人に電話をかけたが電話はつながらなかった。やっと加藤先生と連絡がとれ少し安心した。とりあえず家に待機しておくようにと指示を受けたので部屋の掃除をして次の連絡を待った。電気は、9時頃に復旧した。水道が使えたのですぐにご飯をできるだけ炊いた。昼頃になりテレビも映り、地震の被害がすごいことに驚いた連絡を待っていたが、いくら待っても連絡が来ないので、バイクで学校に行こうと思い途中まで行ったが、バイクが途中で動かなくなり、しかたなく家に戻った。そして、加藤先生と電話がつながり「今日は、他の先生方も多く来られているから、明日から頑張ってくれ」と言われた。申し訳ない気持ちで一杯だったが、とりあえず実家が心配になり、実家に行くことにした。やっとの思いで実家につき両親の顔を見て安心した。両親を家につれて帰り、一晩中テレビを見ていた。次の日は朝7時半ごろ家を出た道路という道路は大渋滞で、西神中央から名谷まで4時間かかった。それから実家に両親を送り、学校に着いたのは18時半だった。今、あの時のことを思い出すと1日目に学校に行けなかったことがとても悔しい。

1月16日、自分の会社の新年会をひかえ、企画と準備に追われていたが、最後のチェックを終え夕刻には自宅にもどることができた。家族と食卓を囲み今年の目標などを子どもたちと話し合い、何となくうれしくなった私は、普段より少し多めの酒を飲み、気持ちよく寝床につくことができた。

ところが明け方、ドォーンという音とともに大きな横揺れに襲われた。窓から外をのぞくと、前の家がつぶれていた。次の余震が来たらわが家も危ないと思い、妻と子どもの部屋に行こうとしたが、割れたガラスや倒れた家具に行く手を阻まれ、大声で無事を確認するしか方法がなかった。余震の続く中やっとの思いだし懐中電灯を見つけた時、これで助けられると思った。懐中電灯の明かりを頼りに妻と子どもたちを救いだし、外に出たのは6時30分を過ぎてからだった。外はまだ暗いのに、鷹取方面で火災が発生したのか明るく見えた。家族を車に避難させ終わった時、むかえの家の身体が不自由なおじさんが2階から降りれず助けを求められているのに気がつき、ガレージの塀に登り無事救出することができた。次に店のことが気になり、急いで私は走った。しかし、そこで見たのは電柱にもたれかかり、シャッターがひん曲がった哀れな姿だった。すき間からのぞき込んだ店内は、全商品が割れ、水浸しになっていた。シャッターをこじ開け中に入った。そこはまるで酒風呂状態であった。ビール・日本酒・洋酒・焼酎・ワインなどあらゆる酒類が混合し悪臭を放っていた。気分が悪くなり外に出たとき、同じく店と家族を心配し駆けつけてきた私の父親と出会い、お互いの無事を確認でき、安心した。

次は駒ヶ林の店だ。車で出かけたが、信号は停まり、電柱は曲がり、倒壊した家が道路に迫り出し、まるで正月早々に子どもと見たゴジラの映画の場面のようにあり、ショックの連続だった。7時40分すぎ駒ヶ林の店の前に立った私は、これで会社はダメだ、人生も終わりかと思うほどだった。この会社を作り上げてきた父を思うとさらに厳しい思いにさせられた。そこへアルバイトのM君が駆けつけてきた。3人で道路まで飛び出した瓶の始末に取りかかり、シャッターを上の方からこじ開け、中の様子をのぞいた。駒ヶ林の店は倉庫も兼ねていたため本店の10倍以上の商品が置いてあった。そのすべてが倒壊し、店の中はまるでプールであった。あらゆる酒が混じり目を開けておれない状況になっていた。なにからどう手をつけようと思案している時、弟が駆けつけ、後を追うように従業員たちが次々に出動してきてくれた。この非常事態にも関わらず、家のこともあるのに・・・ありがたかった。うれしかった。熱いものがこみ上げてくる思いでいっぱいだった。

駒ヶ林の店は従業員にまかせ、次は事務所にむかった。事務所も散々たる状況であり、手もつけれないまま呆然としていた。そこへ大橋4丁目まで火が回ったとの情報が入った。「なに！」声にはならなかった。そこには従業員の寮があったのだ。私とT君で寮にむかった。すでに寮の隣の家が燃えていた。寮はアパートの2階のため車を寮に近づけ、2階から布団・たんす・テレビ・こたつなどを必死に運び出した。「火が回って危ないぞ」の声を聞いたが「危ないのは百も承知、ほっといてくれ」という気分だった。それから5分後寮に火が回り、20分後には全部が燃え落ちてしまった。ああ・・・人間の作り出したあらゆる文明も大自然の前では、何の力も出せず、はがゆい思いで見つめていた。無念だった。

駒ヶ林の店に帰った。従業員たちが頑張ってくれていた。助かった。本当にありがたかった。「いざ鎌倉」言葉を思い出し、会社を思う彼らの熱い心に涙があふれそうになった。夕方明日もあるので自宅に帰るよう指示をしたが、2名の者が店の宿直してくれた。

そして夕闇の中、避難所の家族のもとへと足を運んだ。妻の顔を見たとき、十年も会ってなかったような思いがした。それほど今日一日あまりにも多くのことがありすぎたのだった。小学校3年生と5年生の息子は避難所を走り回っていた。とにかく元気。これが私の心をなごませた。中学校1年生の娘は母親や祖母の手伝いを黙々としていた。頼もしくうれしかった。家族は安心だ。しかし、会社の今後を考えると気が重くなってしまいそうであった。・・・でもやるしかないのだ！家族がいる。熱い思いを持った従業員がいる。と新たな決意を心に秘め1月17日が終わっていった。

兵庫県南部地震データー

(阪神・淡路大震災)

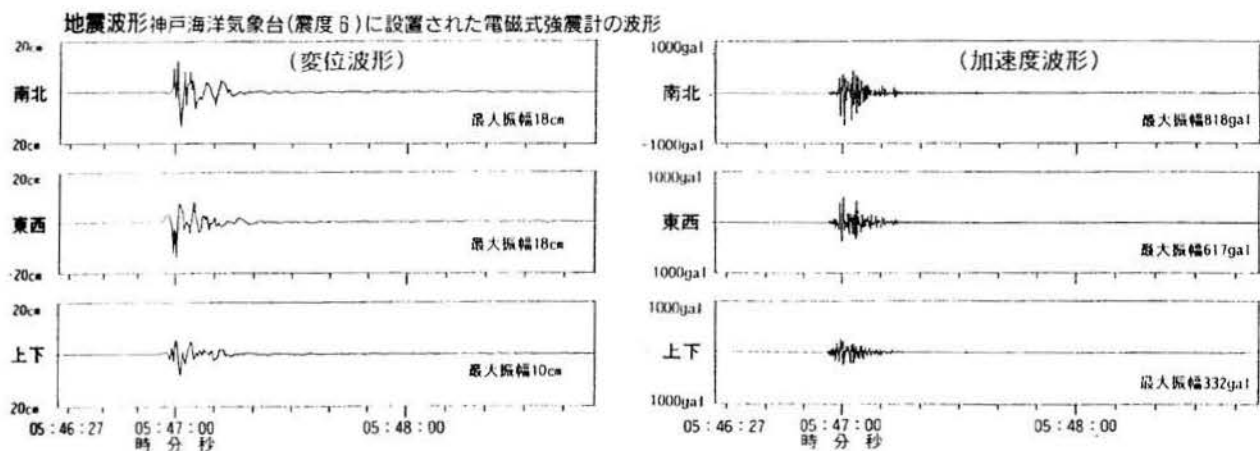
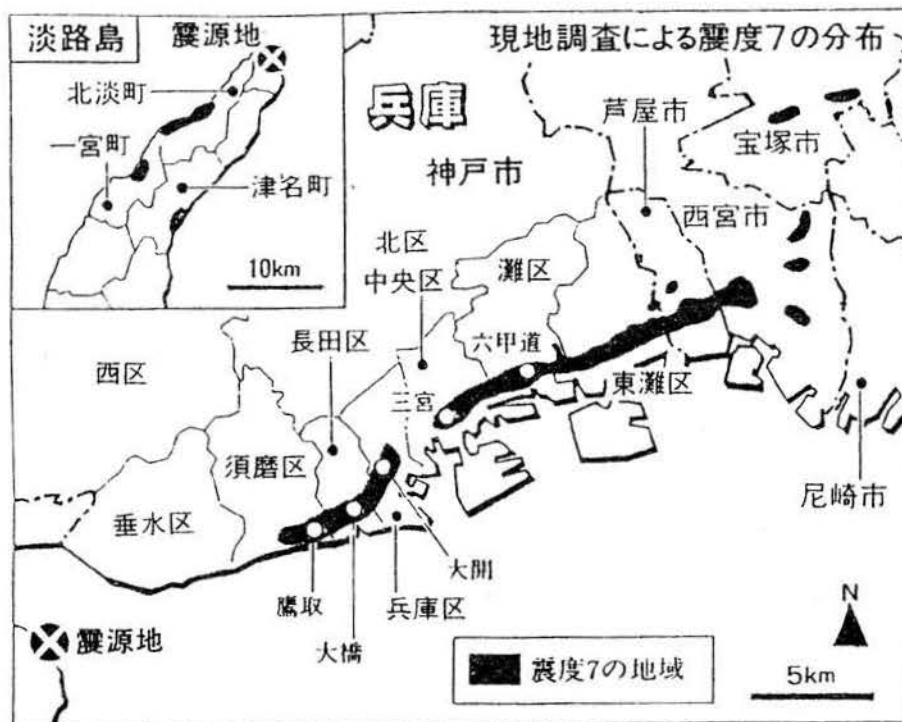
本震 平成7年1月17日午前5時46分

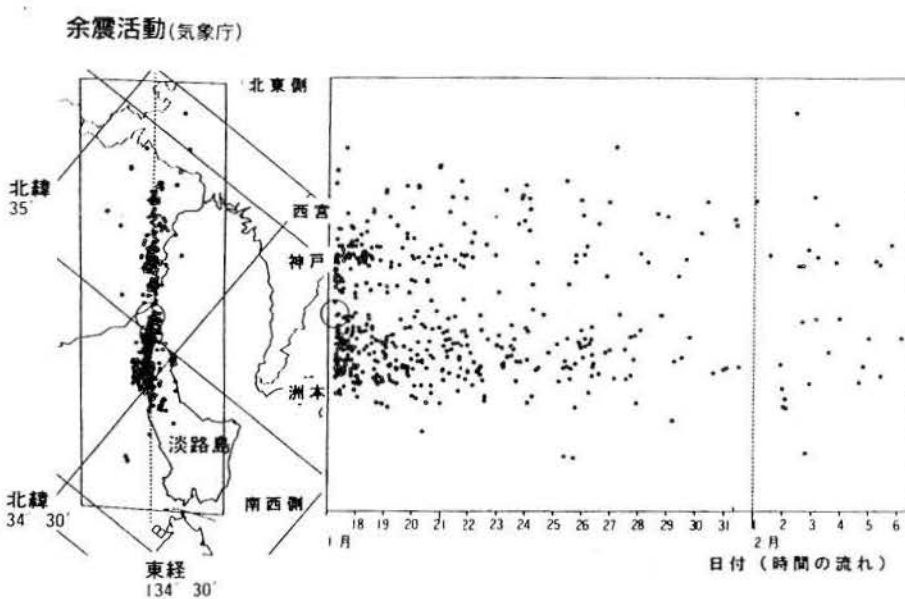
震源地 淡路島北淡町富島沖野島 (気象庁発表)
神戸市長田区南部海岸線 (京大地震研究所2月2日発表)

地震規模 マグニチュード 7.2

震度 6 一部地域 7 (本校及び校区震度7)

南北方向 最大 818ガル
東西方向 最大 617ガル
上下方向 最大 332ガル





余震データ

	震度 4	震度 3	震度 2	震度 1	合計
1月17日(火)	3 5:49 5:53 8:58	7	25	23	58
18日(水)		3	1	10	14
19日(木)		2	5	6	13
20日(金)		1	2	3	6
21日(土)		1		4	5
22日(日)				2	2
23日(月)		2	1	1	4
24日(火)			1		1
25日(水)	1		1	2	4
26日(木)				2	2
28日(土)		1	2	1	4
29日(日)			1	1	2
31日(火)				1	1
2月 1日(水)				1	1
2日(木)		1	1	1	3
3日(金)			1	1	2
6日(月)				1	1
8日(水)				1	1
16日(木)				1	1
18日(土)		1			1
21日(火)				1	1
24日(金)				1	1
25日(土)			1		1
3月 2日(木)				1	1
5日(日)				1	1
9日(木)				1	1
17日(金)			1		1

校区内及び本校周辺における震災死亡者数

町 名	死亡者数
腕 塚	4
久 保	18
二 葉	16
駒ヶ林	12

町 名	死亡者数
野 田	6
海 運	19
本 庄	19
長 楽	11

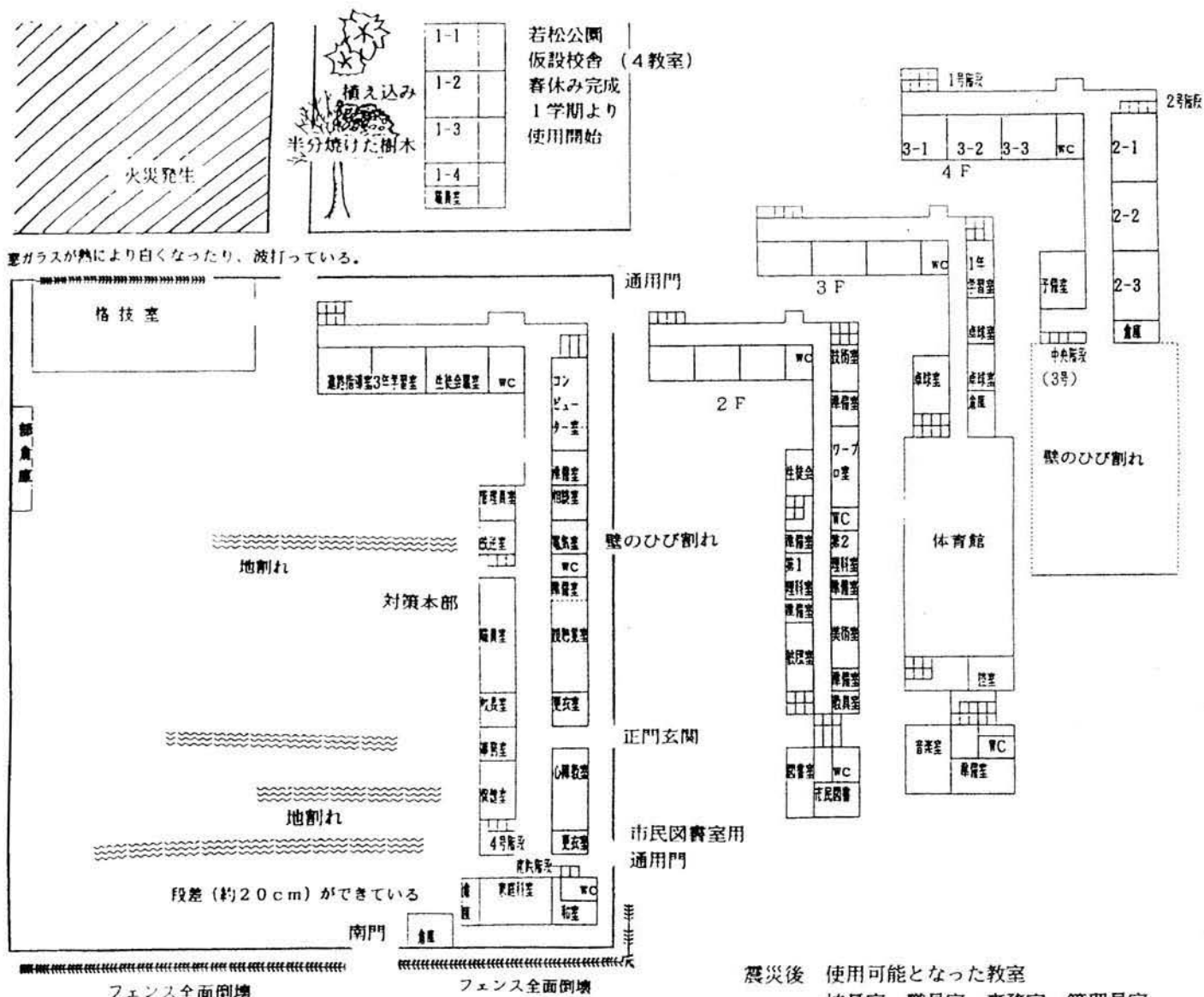
町 名	死亡者数
日 吉	43
若 松	52
大 橋	28

校区内及び学校周辺倒壊家屋数と全半焼家屋数

町 名	全 壊	半 壊	全半焼
腕 塚	491	110	415
久 保	489	155	
二 葉	768	89	
駒ヶ林	359	342	
野 田	118	41	1439
海 運	52	40	
本 庄	285	59	
長 楽	183	89	
浪 松	20	5	
日 吉	99	30	
若 松	224	14	47
大 橋	250	47	

(長田警察署・長田消防署調)

校舎の状況 (震災直後～8月末日)



校舎内の主な被害状況

- (1) 南館の傾斜 (北側約20cm隆起)
ガス管、クーラー配管の破損、水道管の破裂、鉄階段の離脱
- (2) 南側フェンスの全面倒壊、正門、通用門のひび割れ
- (3) グラウンドの地割れ、グラウンド水道管破裂
- (4) 体育館天井の梁部分の壁剥離、電気室壁の大亀裂 (クラック)
- (5) 本館・北館接合部の隆起、教室黒板の湾曲・トイレひび割れ
- (6) 校長室・大金庫の転倒、事務室・職員室・図書室・理科室
職員更衣室・各準備室等の書架及びロッカーの転倒
- (7) 視聴覚機器・情報処理機器・放送設備・その他の電気製品
及び管理備品の破損多数

避難所となった教室

格技室

- 1 F 3教室・コンピューター室と準備室
視聴覚室・更衣室・心障学級
管理員室・男女職員更衣室
自在庵
- 2 F 3教室・技術室と準備室・ワープロ室
生徒会室
- 3 F 3教室・学習室・卓球室・体育館
- 4 F 3教室・学習室・卓球室

震災後 使用可能となった教室

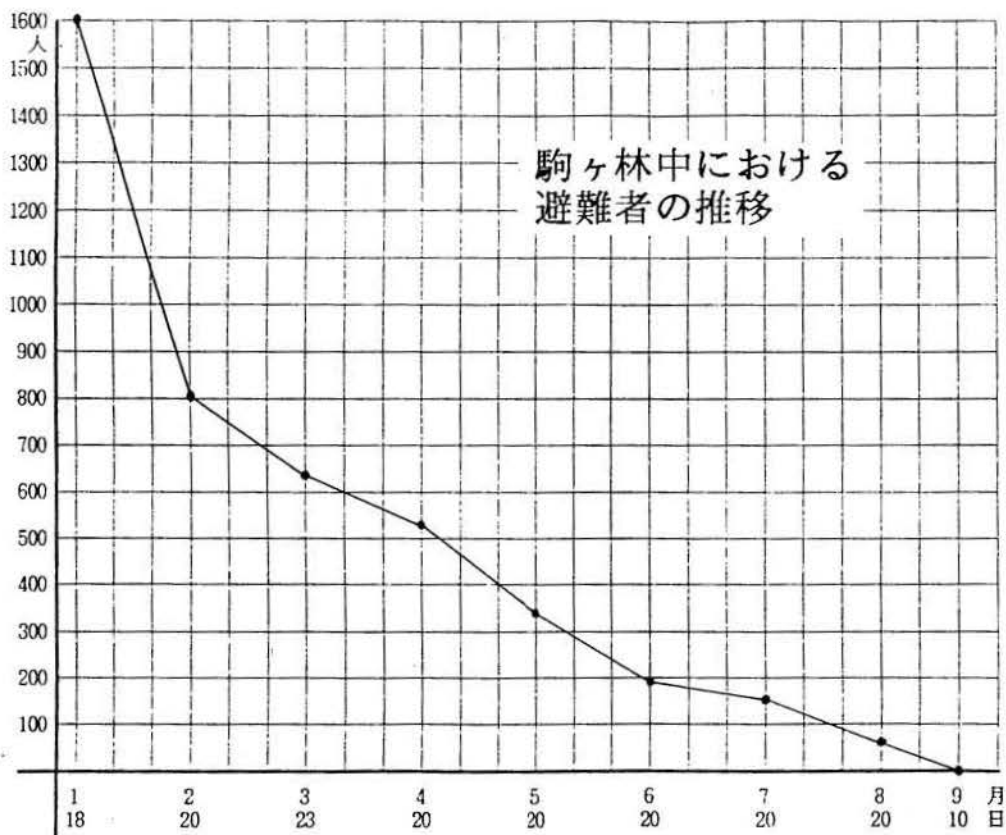
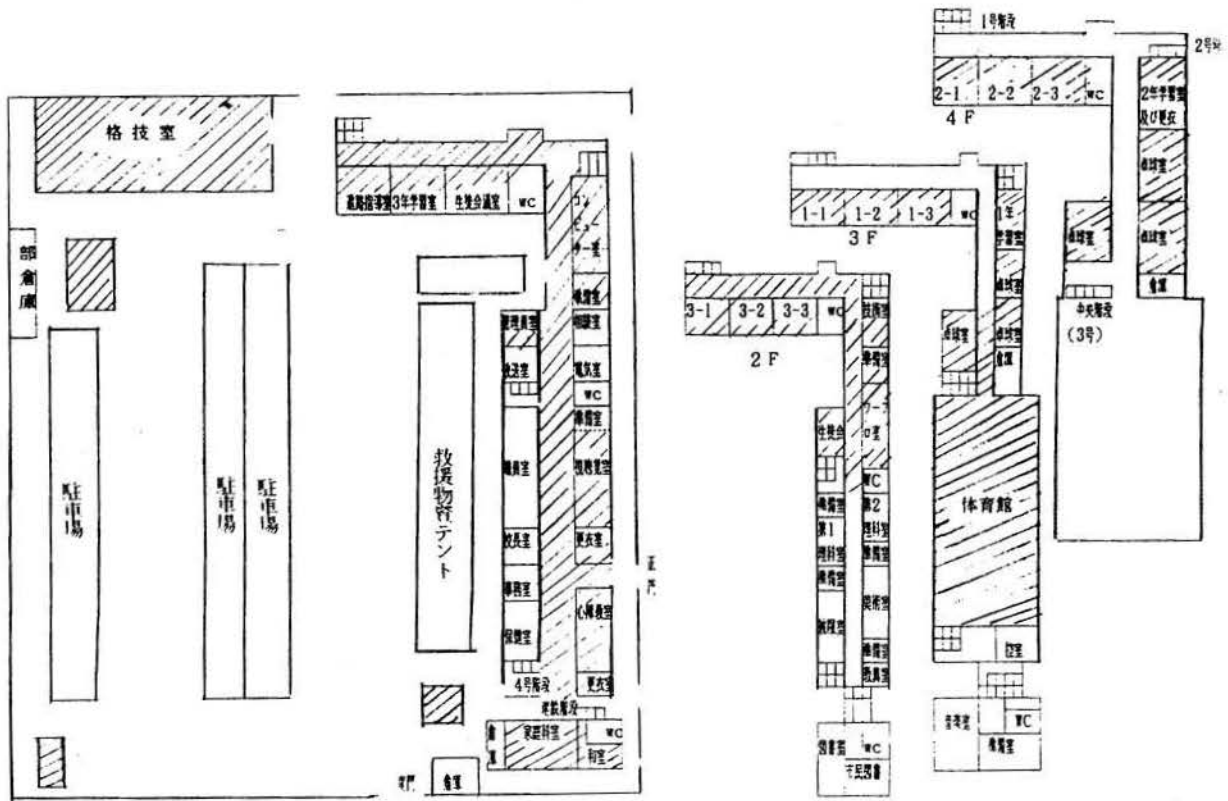
校長室 職員室 事務室 管理員室
相談室 (3年進路職員室とする)
視聴覚準備室
第1・2理科室と準備室
被服室と準備室
美術室と準備室
音楽室と準備室
図書室と市民図書室
保健室

使用不可能な教室 調理室

春休み後使用可となった教室

4階 7教室 (3年1～3組)
(2年1～3組)
(予備室)
仮設校舎4教室 (1年1～4組)
6月中旬より使用可となった教室
体育館
3階 卓球室2教室
自在庵 (和室)

駒ヶ林中における 避難所最大スペース



P.25-34 「新聞・雑誌記事より」 省略

1. 研究主題

◆震災関連◆

神戸市立駒ヶ林中学校 教諭 松下 竜 介

神戸市立駒ヶ林中学校 教諭 柏 原 伸 行

震災体験を生かした数学教育

— 成就感をふくらませる指導 —

2. 発表の概要

(1) はじめに

震災による学習環境の破壊は、生徒の精神的不安定や学力の低下等、多くの教育課題を生じさせた。限られた時間、限られた状況のもと、今まで以上の厳しい指導内容の精選と指導法の改善が求められる。

生徒一人一人のよさを引き出すためには、どのような数学の指導法、評価の工夫が必要であるのか。成就感という生徒の情意面を通して様々なアプローチを試みた。

(2) 研究の内容

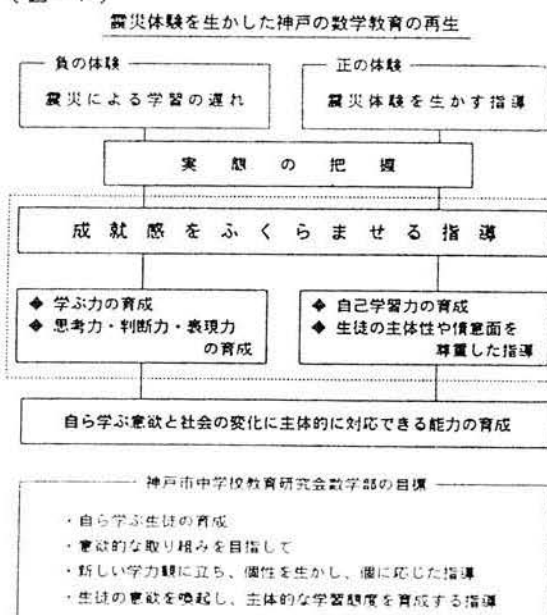
平成7年2月1日より補充学習会として [図-1]

教育活動を再開した。当初は、主にプリント学習を中心として、午前3校時の形態をとった。生徒の大半が震災を受けたにもかかわらず学習会に前向きに参加し、仮教室には熱気があった。しかし、この震災体験を生かし、たくましく生き抜こうとするものの、学習の遅れは目に見えていた。

平成7年度になり、正常な授業が再開され、学習の遅れを取りもどすため、また数学教育の再生の好機でもあり、図-1に示すような流れで以下の実践研究を行った。

(3) 研究のねらい

自己学習力は、数学の指導法や評価の工夫で、生徒に成就感を持たせることによって生まれてくる。



上記の仮説のもと、生徒に成就感をもたせることについては

目標の明確化 課題解決学習

を実践していくことが有効ではないと思われる。

① 目標の明確化

自己評価アンケートを実施、情意面を継続的に評価することが、教育評価のこれからの中心的方法であり、必ず生徒にフィードバックさせることが必要になってくる。一人一人の変化変容、質の向上を考えると、1時間ごとの評価の積み重ねが総括的評価につながる。

② 課題学習

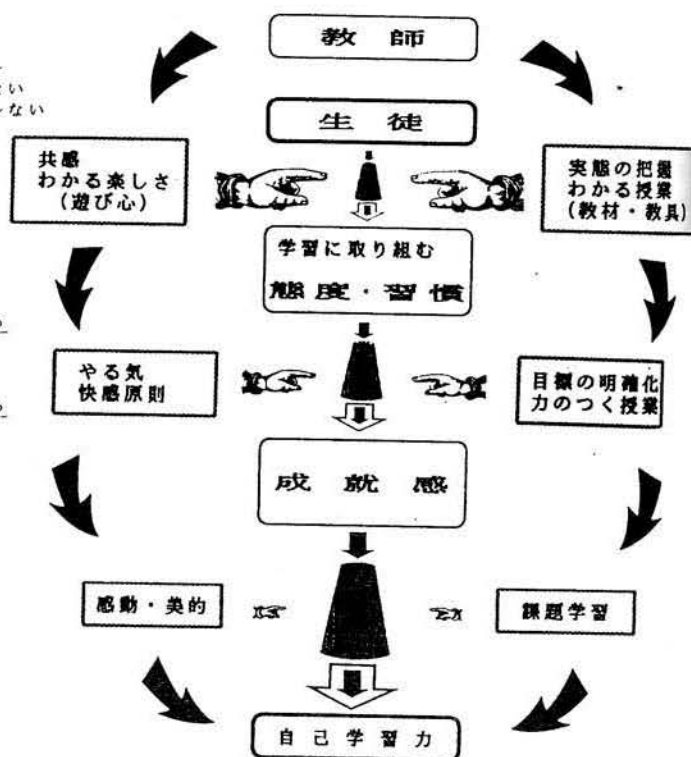
評価のタイミングを見逃さないためにも指導案の作成の見直しが要求される。すなわち、生徒に新しい感覚を呼び起こさせ、数学の考え方とよさから感動を与え成就感へと導く指導案が今必要である。

自己評価アンケートの特徴

情意面を継続的に評価することが、教育評価のこれからの中心的な方法であり、必ず生徒にフィードバックさせることが必要になってくる。一人一人の変化、変容、質の向上を考えると、1時間ごとの評価の積み重ねが総括的评价につながる。すなわち、今後の指導の資料となり、教師の反省を促すなど、教育活動に大きな影響を与える。このアンケートは、形成的評価による一例であり、授業の最後(約3分間)に実施している。

(注) 自己評価の数字
4……とても～
3……だいたい～
2……あまり～ない
1……まったく～ない

自己評価アンケート	
年 組 番・氏名	
1. 今日の数学の授業では、 [] について勉強しました。	学習の目標の再確認 (目標の明確化)
2. 数学の授業は楽しみですか。 4 --- 3 --- 2 --- 1	思考や表現への自信 (関心)
3. 今日の授業に積極的に参加しましたか。 4 --- 3 --- 2 --- 1	取り組みを振り返らせる (意欲・態度)
4. 授業の内容が良く分かりましたか。 4 --- 3 --- 2 --- 1	わかる喜びを気づかせる (充実感)
5. 今日の授業で、自分の目標にどれだけ近づきましたか。 4 --- 3 --- 2 --- 1	学習内容の到達度 (達成感)
6. 今日の授業の感想 []	情意面 (文章で表現)
7. 次の授業は、 [] について勉強します。	次の授業へのイメージ (目標の明確化)



3. おわりに

震災を体験した友とともに学ぶ。

駒ヶ林中学生にとって、震災体験を負の体験ではなく、将来役立つ「学ぶ力・自己学習力」へと転用したい。授業ではまなぶことのできないたくましさや粘り強さの体験を、正(生)の体験としてとらえ、数学教育で感動を与えたい。

この実践研究で様々な課題が生まれるだろう。それを教育現場、生徒に返し、教育活動に取り入れることができるならば、指導法の改善につながるはずである。

限られた時間、限られた状況の学習環境において、『時間、場所がないから教師の一方的な指導』ではなく、生徒一人一人に「学ぶ力・自己学習力」を身に付けさせる指導法を追求することにより、今後の教育課題を解決し、研究活動を続けていきたい。

『震災後の心のケア』 駒ヶ林中学校の取組

1. 震災直後

(1) 生徒の安否確認

家庭訪問や校区巡視、避難所訪問等による情報収集に努めた。

1月24日 長楽公園にて1回目集会 1年60名、2年50名、3年52名

1月28日 長楽公園にて2回目集会 1年47名、2年49名、3年50名

1月28日現在で、在校生292名中290名の安否が確認できた。

生活状況、家族、知人の安否情報を個人カルテに記入、担任は個々の生徒の生活実態を把握することに専念した。

情報のない生徒については、引き続き家庭訪問、知人宅訪問を繰り返した。

(2) 進路個別保護者会

1月27日～2月6日

- ・校区内にポスターや避難所の掲示板に学校からの情報を毎日伝え、生徒同志の口こみで進路の保護者会を随時行っていることを伝えた。
- ・私立高校の入試、公立高校の推薦入試日程が目前にせまり、保護者会のその場で願書に捺印していただくようなケースがほとんどであった。
- ・落ち着いて学習出来るような環境では全くなかったが、1月31日より空き教室を利用し学習教室を開設した。3年生37名集合。
- ・2月1日より3年60名、2月3日より1・2年生の3時間の授業を実施。みな真剣に授業に取り組んだ。午後からは毎日個別保護者会を実施。
- ・具体的な進路の目標に向かって努力することが、心の不安を解消した。

(3) 3年生を送る会（三送会）の実施

全校生が集まれる場所の確保が出来ない。プログラム内容を大幅に変更せざるを得ない。練習時間がとれない。などの理由から、いったんは断念していたが「こんな時だからこそやるべきだ」の声があがり、長田工業高校をお借りして実施する運びとなった。生徒にとっても、皆が協力すれば苦しいことも乗り越えられることを、身をもって体験することができた。

(4) 卒業式、入学式の実施

三送会に続き、卒業式、入学式も長田工業高校をお借りして全校生参加で実施できた。会場準備、片付け等の仕事にも不平不満の声を出す生徒一人もなく、例年以上に心のこもった式を行なうことができた。

(5) 震災体験作文、カウンセリングの実施

震災体験が風化してしまわないうちに、体験を作文として表現したり、担任との会話で表現するなど、ひとりひとりの思いを内に込めないで、外に出していくよう働きかけた。

2. 新年度、新態勢での「心のケア」

(1) 年度当初の教育活動の柔軟な対応

①ホームルーム教室の変更

避難されている方々のご協力で、4階普通教室をホームルーム教室として利用できるようになった。生徒にとっては、大変落ち着いた状態で新学年を迎えることができた。

②生徒の服装について

新1年生・・・5月の更衣期間まで、ジャージ上下とした。

新2・3年生・・・制服のゆずりあいを行ない、経費負担を軽減。

③通学カバンについて

新1年生・・・5月のカバン販売まで、補助カバンか手持ちのカバン可

新2・3年生・・・学校規定の通学カバン。カバンのゆずりあいも行なった

④昼食弁当について

弁当が用意できない場合は、できるだけパンを買い求めてから登校するよう呼びかける。一部の保護者から給食弁当の許可を得たいとの依頼があり、柔軟に対応した。

⑤学習について

震災による影響で、前年度の3学期分の学習が進んでいない単元は、当初特別態勢を組み、学習できていない単元の授業を確保することを知らせた。

⑥心の健康相談について

震災に伴う「心の健康相談」が専門の医師・カウンセラーによって巡回実施されることを知らせた。

⑦家庭訪問を4月17日より実施し、よりはやく生徒の生活実態を把握することに努めた。校区外からの通学者に対しても、全員家庭訪問を実施した。

⑧修学旅行は私服で参加、2年野外活動はYMCA与島で実施、1年自然教室は、家島―母と子の島にて実施。自然の中でできるだけのんびり、心なごむプログラムを取り入れた。

(2) 「生命安全の指導」と「心のケア」を柱とした指導態勢

①校区内の危険箇所の把握及び交通安全指導を兼ね、早朝8時からの登校指導と放課後の下校指導の特別態勢を組み全職員で実施した。

②全校朝集、学年朝集、学級会活動などの機会に「命の大切さ」を訴え、生徒自ら命を守るよう指導してきた。

③生徒ひとりひとりの心の内にあるものを日々の生活の中から見出し、担任と生徒のパイプをより太くするため、生活ノート『My Diary』を全学年統一し活用することとした。

活用の方法については、職員の研修会をもって指導効果の向上を図っている

④期末考査一週間前より40分授業を実施し、放課後カウンセリング週間を全校一斉に実施した。

p.39-211 「日々の記録」「生徒への連絡記録」「生徒会だより」「諸記録」 非公開

「初任者研修（支援活動）を振り返って」

H7.4/17~18

篠山町立後川小学校 西川 智尋

駒ヶ林に向かう途中、車窓から映る外の景色が徐々に変わっていく。テレビの画面で見たあの景色だ。至る所で散乱しているガレキの山。倒壊した家々。傾いたビル。想像していたより、さらにひどい状態の長田の街がそこにあった。駒ヶ林中学に着き、まず初めに目に飛び込んできたのは、壁に貼られたたくさんのビラだ。被災の方を励ますための様々な楽しい催しや生活情報等が所狭しと貼られている。「ああ、本当に多くの人々がこの震災に関わり、助け合っているのだなあ。私もこの2日間何か役に立てることがしたい。」とそう強く思った。

研修の日程は、校区内と学校周辺を自転車で見てまわることから始まった。しばらく、商店街や小さな路地を走っているとつぶれかけた店先で青空市のように品物を並べて商売をしている人。そして、それを買うお客たちで活気づいていた。以前の神戸の街がここでは少しずつとり戻されているような気がして少し安心したものつかの間、つい目と鼻の先の場所では、あたり一面焼け野原が広がっており大変ショックを受けた。話に聞いていたとおり、まさに戦争跡のようである。また、所々で花も添えられている。地震は多くの人の命を奪ってしまったのだ。そう実感させられた校区内見学だった。

私達の主な手伝いは、食事の配布準備と配布だったが、それも婦人部という部が組織されており、スムーズな流れが出来ていたのも、とてもやりやすかった。食事の中身がぐちゃぐちゃにならないよう心配しながら仕分けをする。その数は500人以上である。ということは、まだそれだけの人数の人々が家もなく避難されているということになる。地震から3ヶ月経ったが、本当に厳しい状況であると思う。また、今はライフラインも全てつながっているが、それまでは衛生面も健康面も今までの生活と一変した状態を余儀なくされていたのである。想像するだけで身震いがする思いである。被災者の方々の明るい笑い声を聞くにつけ、こんな震災は二度と起こってほしくないと思った。今回の研修の講話の中で、「危機管理にマニュアルは無い、マニュアルは人である。」という言葉が印象強く残った。いくら事前にマニュアルがあっても、ライフラインが止まればその通りにはいかない。人が動き考えていく中で、マニュアルが出来上がっていくのである。地震が起こって3ヶ月。私は、今回はじめてボランティアとして神戸に来たわけであるが、いろいろなことがうまく機能し、まわっていると思った。それは、地震の後、多くのボランティアの人達をはじめ、被災者自らが立ち上がり、今回の流れが出来ていたと思う。その根底には、人々の助け合うやさしい気持ちが流れていたから、このような今の状態があるのだろう。その中でも、特にこの流れの基本を作っていた駒ヶ林中学の職員の方々の働きは大変なものがあったと思う。同じ教師として大変誇りに思うし尊敬もする。私がある様な立場に立った時、自分が被災されながらも人々のために全力を尽くすことが出来る。そんな教師、そして一人の人間になりたい。それは、私の目標であり、これからの課題であると思う。1泊2日と短いボランティア活動であったが、神戸の街を自分の目で確かめることが出来き、また駒ヶ林中学の職員の方や、ボランティアの人々の働く姿を見、そして自分も少しでもその手伝いが出来て本当に良かったと思う。

篠山町立篠山養護学校 藤川 佳子

今回、救援活動に参加させていただいて、たくさんのことを見、聞かせていただくことができました。マスコミ等で何度も目にしたような状況も、実際に目にするのは、かなりつらいものがありました。それらに関して考えさせられることは、もちろんたくさんあったのですが、この二日間で最も印象に残ったのは、避難所の子供たちとの学習会と仮設校舎の裏に立つ木々の2つです。

夜、子供たちとの学習会の場所と時間を設けていただきました。いつも参加者が少ないと聞いていたので、まず、子供を誘うことから始めました。はじめ廊下に小学4年生の男の子が1人いました。いろいろな情報によって先入観をもっていた私は、その子に声をかけるべきかどうか、どうやって声をかけようか・・・とても迷いました。名案も浮かばず、その子の横を通ったときには、もう、ふつうに「ぼく、何年生？」と声を出してしまいました。その子から言葉が返ってくるまでは、自分のしたことが間違っていたんじゃないかと、とても不安でした。「4年生！」という声と“視線”が返ってきました。もう、嬉しくて嬉しくて思わずはしゃいでしまいました。結局、二歳から中学二年までの5人の子供と勉強・・・遊びました。歌をうたったり、手遊びしたり、お絵かきしたり、勉強したり・・・ほんとうに楽しい時間でした。当初の不安は、余計でした。子供たちは、とてもとても元気で明るいです。あのかわいい笑顔や、笑い声は、すさまじい街の様子と対照的で、一層胸をあつくした気がします。

また、昼間、作業の後、教頭先生が校内を案内して下さいました。仮設校舎の裏手に残っている木々は、向かいの家の火災のために、その側だけこげ、その反対側は、青々と葉をつけた枝が伸びていました。その木を見て教頭先生は「コンクリートは、ぺちゃんこなのに、この木はこんなに元気だ。いかに木が強いのか、ということがよくわかる。」とおっしゃいました。はっとしました。人間もどれだけ地に足をつけて、根を広くはれるかどうかが、人の強さであり、大きさではないかなと思いました。これらの木々は、マスコミでは報じられないと思います。人と人とのあたたかい関わり等、よく耳にするホットな話の裏にも、街を歩くとたくさん、あたたかいものが転がっているような気がします。いろんな方向から、人として必要なものが見つかるんじゃないかなと思いました。

最後に、研修のお世話を下さったK先生のお話の中に、「先生というのは、同じ公務員でも、一番、地域に根ざした公務員であり、こんな状況下でも、ずっとみなさんの中に入って奉仕することができる。」という内容のものがありません。こんな、すばらしい職業に自分が就いていることを、心から幸せに感じました。こんな気持ちを持たせて下さった、自分のまわりの方々に感謝すると同時に、この幸せを、これから出会うたくさんの人に返していこうと思いました。

p.215-246 「支援個人・団体一覧」「マスコミ一覧」は非公開

沿革史

昭和22年	4月20日	中井順三、初代校長として着任
	4月22日	長楽小学校で開校式を行う (職員10名、生徒1年生のみ388名)
	7月1日	校章を制定する
23年	4月24日	P T A 結成される(初代会長上田寿一氏)
24年	2月10日	夜間学級を開設する
24年11月	15日	校歌を制定する
25年	2月16日	長楽校より現在地に校舎を移転する
	3月1日	移転記念式典を盛大に行う
28年	5月12日	本校に駒ヶ林実技研究院が開設
29年	4月1日	栃木勇、二代校長として着任
30年10月	4日	学校図書館開き
31年	4月9日	方面教育賞「諸般の事情により就学困難な生徒に対し、 学校の自主的・建設的な配慮による救済学級を設け長 欠救済に多大の効果を上げた」
32年	3月4日	校旗制定式及び寄贈式を行う
	6月14日	校庭にふじ棚をつくる
	10月13日	駒中十周年記念式典並びに記念体育大会を行う
33年	4月1日	西倉福一、三代校長として着任
	6月5日	校庭西側金網取付工事完了
34年	4月27日	駒ヶ林青年学級開設
	4月30日	全校生徒に生徒手帳一斉交付
	10月3日	校門開通式(現南門)
35年	3月5日	国旗掲揚台落成式
	3月31日	夜間学級閉鎖
	7月29日	野田プール竣工式(駒中、二葉、長楽小連合プール)
	9月24日	西校舎及び理科室改修工事着工
36年	3月12日	生徒増のため講堂に四教室増設工事着工
	8月6日	南校舎増築工事着工 2月24日竣工
37年	6月9日	昭和三七年度校舎改修工事着工(東校舎三階八教室及

			び二階廊下) 9月3日竣工
38年	2月 6日	校舎二階改修工事着工(3月23日竣工)	
	4月 1日	松井富左一郎、第四代校長として着任	
	7月18日	改修工事着工(東校舎2階6教室)	
39年	4月 1日	市教委学校カウンセリング研究指定校となる	
	11月 9日	講堂兼体育館建設工事着工・新管理室改修工事着工 翌年4月7日竣工	
40年	5月11日	放送設備工事着工、6月7日完成	
	7月21日	改修工事・講堂内装工事に着工、11月19日竣工	
41年	1月27日	体育館開き	
	2月10日	学校カウンセリング研修会	
	2月11日	調理室改修工事着工	
	4月 1日	江見宏、第六代校長として着任	
	4月10日	NHK放送教育研究指定校となる	
42年	4月10日	放送教育第十九回全国大会会場校となる	
	9月18日	創立二〇周年記念として、校庭西側ベンチ設置及び芝 生、植樹完成	
	10月28日	NHK指定研究校として、放送教育研究発表会を行う	
43年	2月10日	創立二〇周年記念式	
	11月21日	放送教育全国大会(社会科・道徳部会)会場校	
44年	4月 1日	中村金丸、第六代校長として着任	
45年	4月27日	万国博覧会見学	
	10月30日	兵庫県国語研究大会	
46年	4月 1日	山根謙造、第七代校長として着任	
47年	2月25日	文部省・市教委指定道徳教育研究中間発表	
	6月13日	グリーンスクール初めて開始 国立淡路青年の家	
	11月13日	文部省指定道徳教育研究大会	
49年	7月22日	校舎外装工事始まる 10月竣工	
	11月 8日	兵庫県社会科研究大会	
50年	3月25日	駒中が丘完成、スポーツ像除幕式	
	4月 1日	小川純夫、第八代校長として着任	
	8月19日	第二期外装工事始まる	

51年	4月 1日	長谷川殖、第九代校長として着任
52年	5月 2日	創立三〇周年記念式典挙行
	7月25日	校舎改修工事（北校舎）完工
54年	2月10日	プレハブ校舎建築開始（学校改築着工日）
	5月25日	校舎改築起工式
55年	4月 1日	波多野要、第十代校長として着任
	6月 2日	第二期改築工事着工 翌年5月20日竣工
56年	5月21日	北校舎への移転
	7月 7日	校舎全面改築記念式典
58年	4月 1日	山田稔、第十一代校長として着任
	6月13日	南校舎便所改修工事着工 9月11日竣工
	8月22日	玄関石彫校訓取付
	12月28日	図書館改修工事開始 翌年1月7日完工
60年	9月 1日	和室「自在庵」披露 廃品回収の浄財で改装
61年	4月 1日	寺崎孝之、第十二代校長として着任
	6月12日	早朝奉仕デー開始（若松公園周辺道路の清掃）
62年	5月26日	格技室建設測量開始 翌年3月7日竣工
	7月13日	ワープロ寄贈を受け、ワープロ授業開始 （キャノワード43台）
	4月 1日	森本坦、第十三代校長として着任
平成 元年	3月 4日	防球ネット工事開始 4月5日完工
	4月 7日	ワープロ教室改修完了
	6月 5日	掲揚柱完成（校章旗掲揚式）
3年	3月13日	県知事賞、くすのき賞受賞（早朝清掃に対して）
	4月 1日	中西研二、第十四代校長として着任
4年	9月12日	学校5日制による第2土曜休業が始まる
	11月26日	神中同研全市研究集会会場
5年	4月 1日	青山義昭、第十五代校長として着任
	5月 4日	駒ヶ林左義長祭復活
6年	11月 7日	頭髮自由化
7年	1月17日	兵庫県南部地震発生と同時に避難所となる
	9月10日	避難所閉鎖

編集後記

加 藤 直 行

本校教職員が1月17日より書き綴った記録ノート20冊。本校対策本部に従事した神戸市職員、支援の他都市職員にボランティアの方々が書き綴った記録ノート8冊。さらに諸々の記録を整理し、ここに一冊の記録集が完成しました。

この記録集は、これらのノートをもとに日々の事実を追いながら編集しました。したがって読み物というより、資料の集大成という性格をもっています。世間には様々な読み物が出回っていますが、一つの中学校で地震発生とともに生徒達と避難された方々との共同生活が始まり、共に過ごした日々の記録であり、資料として位置づけてもらえたらと思っています。

この記録集を編集しながら、ノートの1ページ1ページに、今も蘇る思いが頭をめぐり、よくぞここまでがんばってこれたものだというのが実感です。そして現在の駒ヶ林中学校があるのも、この記録集が示すように数え切れない多くの方々のご支援があつてのおかげと思われまふ。ここに改めて、そのご厚意に応える感謝の気持ちをこめて、この記録集をお送りしたいと考えています。

本当に、数多くのご援助とご厚意、ありがとうございました。共に生き、共に生活をし、人の命の尊さと、人としての熱き心に感謝し、この震災で失ったもの以上のものをこの記録集に残せたのではないかとと思っています。もう一度本当にありがとうございました。

原稿

青山校長
田中前教頭
池内現教頭
原田PTA会長
駒中全教職員
英語講師マイケル アンダーソン

ワープロ原稿

青山校長
池内教頭
松下竜介・吉田順子・宮原行雄
加藤直行・樋口仁絵・浅野 勇
長岡和雄・田中重明・田中伸和
前田安正・星 輝幸・濱口由美乃
森脇 毅・柏原伸行

写真

浅野 勇・松下竜介
坂口和美・市川伸之
高橋正明・三宅雅子

表紙

田中伸和

新聞

長岡和雄・マイケルアンダーソン

地図

田中幹人

編集

青山校長
池内教頭
加藤直行
森脇 毅

校正

平井秀幸
富田敏枝
田中幹人

駒中235日の記録

神戸市立駒ヶ林中学校震災記録

発行 平成7年12月22日

編集・発行 神戸市立駒ヶ林中学校

印刷 梶原出版印刷合資会社

限定発行（部内用） 300部